藤並地区遺跡

― 一般国道 42 号（湯浅御坊道路）4 車線化事業に伴う発掘調査報告書 ―

2019 年 3 月

公益財団法人 和歌山県文化財センター

序

和歌山県有田郡有田川町は和歌山県の北西部に位置し、高野山系に源を発する有田川が町域の中央部を西に蛇行しながら有田川流域を形成しています。藤並地区遺跡は、この有田川流域の南端に位置しています。

藤並地区遺跡は、これまで海南湯浅道路及び湯浅御坊道路建設工事に伴う大規模な発掘調査によって、後期旧石器時代から中世にいたる数多くの遺構・遺物が発見されています。また、地元で良質な粘土が採掘できることから、遺跡内とその周辺部には奈良時代の須恵器や瓦を生産した窯跡が多く存在します。このような発掘調査事例の増加に伴い考古学的なアプローチによる生産遺跡と周辺部の状況の解明が期待されているところです。

この度、当文化財センターでは、一般国道 42 号（湯浅御坊道路）4 車線化事業に伴い平成 27 年度から同 30 年度にかけて発掘調査を実施しました。南北に細長い調査ではありましたが、奈良時代の遺物を始め、鎌倉時代から江戸時代にかけて断続的に続く人々の営みの痕跡を新たに発見し、往時の当地域の景観の変遷を明らかにすることができました。

平成 30 年度に出土遺物等整理作業を行い、その成果をまとめることができましたので、発掘調査報告書として刊行します。本書が県民の皆様のみならず、広く一般の活用に資することができれば幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本書の作成にあたり御指導・御協力を賜りました関係各位、地元の皆様に対し厚くお礼申しあげます。

平成 31 年 3 月

公益財団法人　和歌山県文化財センター
理事長　櫻　井　敏　雄

例 言

1　本書は、和歌山県有田郡有田川町土生・明王寺・水尻に所在する藤並地区遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査は、一般国道 42 号（湯浅御坊道路）4 車線化事業に先立つもので、平成 27 年度から同 30 年度に藤並地区遺跡の発掘調査業務を行い、同 30 年度に出土遺物等整理業務を実施した。

3　発掘調査及び出土遺物等整理業務は、西日本高速道路株式会社　関西支社和歌山工事事務所の委託を受けた公益財団法人和歌山文化財センターが、和歌山県教育委員会の指導の下に実施した。

4　発掘調査及び出土遺物等整理業務に要した経費は、西日本高速道路株式会社　関西支社和歌山工事事務所が負担した。

5　現地調査及び調査報告書の刊行に際し、有田川町教育委員会をはじめ、関係機関および地元の方々から御助言・御協力を得た。

6　本書は、発掘調査業務各担当者と協議のうえ、土井が執筆・編集した。

7　図版に使用した遺構写真は、各調査担当者が撮影し、遺物写真は土井が撮影した。

8　発掘調査及び調査報告書の作成にあたっては、次の諸氏から多大な御協力・御教示を賜った。
川口修実（有田川町教育委員会）、山本光俊（和歌山県立紀伊風土記の丘）

9　発掘調査・出土遺物等整理業務で作成した図面・写真及び台帳等の記録資料は、公益財団法人和歌山県文化財センターが、出土遺物は和歌山県教育委員会が各々保管している。

10　発掘調査・出土遺物等整理業務の調査組織は、以下に示すとおりである。

調 査 組 織

事　務　局	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度
事 務 局 長	米田　良博	南　正人	南　正人	井上　挙宏
管 理 課 長	米田　良博	南　正人	南　正人	井上　挙宏
埋蔵文化財課				
埋蔵文化財課長	土井　孝之	土井　孝之	藤井　幸司	丹野　拓
発掘調査業務担当				
埋蔵文化財課	山本　光俊 （技師）	佐伯　和也 （副主査）	川崎　雅史 （技師）	土井　孝之 （副主査）
出土遺物等整理業務担当				土井　孝之 （副主査）

凡 例

1　発掘調査及び出土遺物等整理業務は、財団法人和歌山県文化財センター『発掘調査マニュアル（基礎編）』（2006 年 4 月）に準拠して行った。

2　遺構実測図及び地区割の基準線は、平面直角座標系第Ⅵ系（世界測地系）に基づき、値はm単位で使用している。また、図面に示した北方位は、座標北を示す。

3　座標北は、磁北から 6°　33′　10″ 東偏する。また、座標北は、真北から 0°　26′　50″ 西偏する。

4　遺構実測図の基準高は、東京湾標準潮位（T.P.+）表示である。

5　発掘調査及び出土遺物等整理業務で使用した調査コードと調査地区は、以下のとおりである。

15 - 21・032 - 1	（2015 年度－旧吉備町・藤並地区遺跡－ 1 次）	1・5・8・11 区
15 - 21・032 - 2	（2015 年度－旧吉備町・藤並地区遺跡－ 2 次）	2～4・6・7・9・10・12 区
17 - 21・032	（2017 年度－旧吉備町・藤並地区遺跡）	13 - 1 区
18 - 21・032	（2018 年度－旧吉備町・藤並地区遺跡）	13 - 2・3 区

出土遺物・記録資料の整理に当って、全て上記の調査コードを使用している。

6　地区割の詳細については、本文の第Ⅱ章第 2 節に記述する。

7　遺構番号は、調査区番号を冠し、必要に応じて末尾に種類（遺構の性格）を付した。

例：302 土坑（3 区 02 土坑）、802 溝（8 区 02 溝）

出土遺物登録番号は、各年度の調査毎に算用数字の 1 からの通し番号とした。

8　本書の遺構・土層実測図は、特に縮尺を統一していないが、各々に明示している。図の表現で、遺構、任意掘削・掘り残し、撹乱でケバの表現を各々変えている。

ケバ表現

9　本書に掲載した遺物の番号は、本文・実測図・写真図版において一致する。

10　本書に掲載した遺物実測図の縮尺は、原則として土器類は 1 ／ 3、打製石器類は 1 ／ 2、それ以外の場合は必要に応じて縮尺を明示している。

遺物写真の縮尺は、特に統一していない。

11　調査時の土層の色調・土壌の粒径区分及び出土遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修　小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』（2010 年版）を使用した。

土層名で 2 種類以上の記載のある場合は、前者が主体で、後者が副になることを示す。

本 文 目 次

第Ⅰ章　藤並地区遺跡の歴史的環境 …… 1

第１節　遺跡の地理的環境 …… 1

第２節　遺跡周辺の歴史的環境 …… 1

第３節　調査の経緯と経過（既往の調査） …… 5

第Ⅱ章　発掘調査・出土遺物整理の方法 …… 9

第１節　調査現場の記録作業 …… 9

1　写真撮影作業 …… 9

2　実測図作成作業 …… 9

3　航空写真撮影・基準点測量 …… 9

第２節　調査地の位置と地区割 …… 9

第３節　出土遺物等資料の整理 …… 12

1　出土遺物応急整理 …… 12

2　出土遺物等整理業務 …… 12

第Ⅲ章　各地区の調査成果と出土遺物 …… 15

第１節　各地区の調査成果 …… 15

1　調査の概要 …… 15

2　１区 …… 15

3　２区 …… 16

4　３区 …… 17

5　４区 …… 19

6　５区 …… 22

7　６区 …… 24

8　７区 …… 24

9　８区 …… 26

10　９区 …… 28

11　10区 …… 31

12　11区 …… 31

13　12区 …… 33

14　13-1区 …… 35

15　13-2・3区 …… 38

第Ⅳ章　総括 …… 40

出土遺物一覧 …… 44・45

報告書抄録 …… 46

写真図版　　調査遺構・出土遺物

挿図目次

図１　有田川町西端部（旧吉備町域）の地形と地質 …… 1
図２　藤並地区遺跡と周辺の遺跡 …… 2
図３　既往の調査地位置図 …… 6
図４　調査範囲と地区割（100m区画） …… 11
図５　調査位置と区画割（４m区画） …… 13・14
図６　１区　調査区北壁断面土層図 …… 16
図７　１区　調査区全体図 …… 16
図８　２区　調査区東壁断面土層図 …… 16
図９　２区　調査区全体図 …… 17
図10　３区　調査区西壁断面土層図 …… 18
図11　３区　調査区全体図 …… 18
図12　３区　301・302土坑実測図 …… 19
図13　４区　調査区東壁断面土層図 …… 19
図14　４区　調査区全体図 …… 20
図15　４区　401・402・403・405・408土坑断面土層図　21
図16　５－1区　調査区東壁断面土層図 …… 22
図17　５－2区　調査区東壁断面土層図 …… 22
図18　５区　調査区全体図 …… 23
図19　６区　調査区西壁断面土層図 …… 24
図20　６・７区　調査区全体図 …… 25
図21　７区　調査区西壁断面土層図 …… 26
図22　８区　調査区西壁断面土層図 …… 26
図23　８区　調査区全体図 …… 27
図24　８-2区　調査区南壁と802溝断面土層 …… 27
図25　９区　調査区西壁断面土層 …… 28
図26　９・10区　調査区全体図 …… 29
図27　９区　902・904・906土坑、903溝断面土層図 … 30
図28　10区　調査区東壁断面土層図 …… 31
図29　11-２区　調査区東壁断面土層図 …… 32
図30　11区　調査区全体図 …… 32
図31　11-１区　1101土坑実測図 …… 32
図32　12区　調査区西壁断面土層 …… 33
図33　12区　調査区全体図 …… 34
図34　12区　1201自然流路断面土層図 …… 35
図35　13-１区　調査区南壁断面土層図 …… 35
図36　13区　調査区全体図 …… 36
図37　13－１区 1301・1302・1304溝、1303土坑断面土層図　37
図38　13－２・３区　調査区東壁断面土層図 …… 38
図39　出土遺物実測図１ …… 42
図40　出土遺物実測図２ …… 43

表目次

表１　藤並地区遺跡と周辺の遺跡地名一覧 …… 3
表２　発掘調査・出土遺物等整理業務工程表 …… 7
表３　藤並地区遺跡　各地区出土遺物数量 …… 41

写真目次

写真１　土生池遺跡出土のナイフ形石器 …… 4
写真２　旧吉備中学校校庭遺跡第４次調査
　　竪穴建物20・22（南西から） …… 4
写真３　田殿尾中遺跡出土の弥生土器 …… 4
写真４　天満Ⅰ遺跡中世墓出土の和鏡 …… 5
写真５　藤並地区遺跡1991年度M地区出土の旧石器 … 5
写真６　藤並地区遺跡1991年度J地区検出掘立柱建物跡 … 6
写真７　2006-Ⅰ区　調査遺構全景と湯浅御坊道路
　　（北北東上空から） …… 7
写真８　出土遺物の実測図作成作業 …… 12
写真９　遺物実測図のトレース図作成作業 …… 12
写真10　1991年度調査M地区と13区（東側上空から） … 37

写真図版目次

写真図版１　調査地全景・１区調査遺構
１　調査地全景：手前は９区（10区上空から北側を望む）
２　調査地全景：手前は7区（６区上空から南側を望む）
３　１区　調査区全景（北から）
写真図版２　２区調査遺構
１　２区　調査区全景（南から）
２　２区　調査区東壁北端断面土層（南西から）
写真図版３　３区調査遺構
１　３区　調査区全景（南から）
２　３区　調査区西壁中央～北端断面土層（南東から）
３　３区　302土坑断面土層（北東から）
写真図版４　４区調査遺構
１　４区　調査区全景（南から）
２　４区　調査区東壁中央断面土層（南西から）
３　４区　401土坑断面土層（北から）
４　４区　402土坑断面土層（北北西から）
５　４区　403土坑断面土層（北東から）
６　４区　405土坑断面土層（南から）
写真図版５　５区調査遺構
１　５－１区　調査区全景（南から）

２　５－２区　調査区全景（北から）
３　５－２区　調査区東壁断面土層（北西から）
写真図版６　６区調査遺構
１　６区　調査区全景（南から）
２　６区　調査区西壁断面土層（南東から）
３　６区　石鏃出土状況
４　６区　土器出土状況（南東から）
写真図版７　７・８区調査遺構
１　７区　調査区全景（南から）
２　７区　調査区西壁断面土層（南東から）
３　８－１区　調査区全景（南から）
写真図版８　８区調査遺構
１　８－１区　801落ち込み調査区西壁断面土層（東から）
２　８－２区　調査区全景（北から）
３　８－２区　802溝完掘状況（東から）
写真図版９　９区調査遺構
１　９区　調査区全景（南から）
２　９区　調査区西壁断面土層（東から）
３　９区　902土坑断面土層（南から）
４　９区　903溝断面土層（南から）
５　９区　904土坑断面土層（北から）
６　９区　906土坑断面土層（西から）
写真図版10　10区調査遺構
１　10区　調査区全景（南から）
２　10区　護岸杭列検出状況（南から）
３　10区　1001土坑完掘状況（南から）
写真図版11　11区調査遺構
１　11－１区　調査区全景（南から）
２　11－２区　調査区全景（北西から）
写真図版12　11･12区調査遺構
１　11－２区　1102落ち込み完掘状況（南から）
２　12区　調査区全景（北西から）
３　12区　1201自然流路断面土層（南西から）
写真図版13　13区調査遺構
１　13－１区　調査区全景（北西から）
２　13－１区　調査区南壁断面土層（北から）
３　13－２区　調査区全景（北北西から）
写真図版14　13区調査遺構
１　13－３区　調査区全景（北北西から）
２　13－３区　調査区東壁断面土層（北北西から）
３　13－３区　調査区東壁断面土層（西南西から）
写真図版15　出土遺物１
写真図版16　出土遺物２

第Ⅰ章　藤並地区遺跡の歴史的環境

第１節　遺跡の地理的環境

和歌山県有田郡有田川町は、紀伊半島の西岸を占める和歌山県の北寄りに位置する。地勢は東が紀伊山地で奈良県に接し、北には長峰山脈、南には白馬山脈が横たわり、その間を高野山系に源を発し、紀伊水道に注ぐ有田川が西流する。町域は有田川流域の下流付近から上流域を占め、東西に長い。平成 18 年に有田郡内の吉備町・金屋町・清水町が合併してできた町で、面積は約 352 ｋ㎡、人口は平成 30 年 10 月末現在で 26, 662 人を数える。

藤並地区遺跡（図２の 32、以下、「図２」を省略）は、有田川町（旧吉備町）土生・明王寺・水尻に所在し、有田川河口から約 10 ㎞遡った左岸に位置する。遺跡が所在する有田川左岸は、中世代白亜紀の地層からなる緩やかな傾斜を示す山地地形が広がり、その間に小河川により形成された小規模な開析谷が多く存在する。さらに、山地北斜面では浸食作用による河成段丘面が形成され、その下位には堆積作用による氾濫原および沖積平野部が発達するなど、有田川流域ではもっとも安定した平野部が広がる地域である。そのなかにあって藤並地区遺跡は、雲雀山からの派生丘陵や土生山・水晶山・神楽山などの標高 60 ～ 130 ｍほどの山地地形に囲まれ、標高 19 ～ 25 ｍ付近に位置するにも関わらず、盆地状の湿地に近い条件下に位置している。

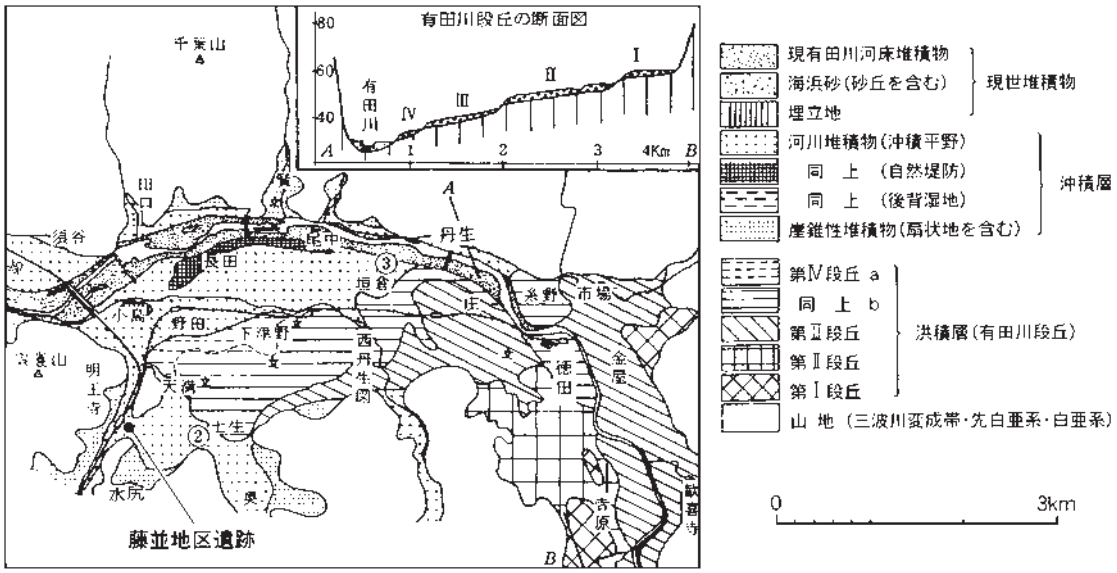


図１　有田川町西端部（旧吉備町域）の地形と地質

第２節　遺跡周辺の歴史的環境

藤並地区遺跡が所在する有田川下流域は、旧石器時代の遺跡を皮切りに遺跡の分布が比較的密に認められる地域である。付近には沖積平野と河成段丘が発達し、有田川流域では最も広い平野が広がっており、この平野部を基盤に旧石器時代から中・近世に至る各時代の遺跡が点在する。

旧石器時代の遺跡は、日高川下流域周辺、紀ノ川下流域左岸などとともに顕著な地域として周知されている。日高川下流域の遺跡とともに石材にサヌカイト以外に硬質頁岩を用いるのが当地方の特徴である。

図２　藤並地区遺跡と周辺の遺跡（1：25,000）

表１　藤並地区遺跡と周辺の遺跡地名一覧

遺跡番号	遺跡名	所在地	種　別	時　代	立　地	摘　要
有田川町（旧吉備町域）						
1	田殿廃寺跡	田口	寺院跡	奈良	丘陵裾	瓦
2	大谷古墳	大谷	古墳	古墳	丘陵裾	須恵器
3	大谷２号墳	大谷	古墳	古墳	丘陵裾	円墳、鉄刀
4	築那印跡	大谷	寺院跡	平安～室町	扇状地	土師器、須恵器、瓦器、仏像瓦、文字瓦、石塔
5	賢遺跡	賢	散布地	奈良	扇状地	
6	夏瀬の森遺跡	出	散布地	弥生	山麓	弥生土器
7	夏瀬の森祭祀遺跡	出	祭祀跡	弥生	丘陵頂	神奈備形の山岩、弥生土器
8	最勝寺跡	出	寺院跡	平安～室町	丘陵	瓦、瓦器、石塔
10	田殿尾中遺跡	尾中	集落跡	弥生～室町	沖積平野	竪穴建物、環濠、水田跡、弥生土器、石器、瓦器
11	旧吉備中学校校庭遺跡	下津野	集落跡	弥生～鎌倉	河岸段丘	竪穴建物、掘立柱建物、鋳造遺構、弥生土器、石器、小型青銅鏡、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器
12	野田の宝篋印塔	野田	石塔	南北朝	河岸段丘	貞和二年銘、県史跡
13	観音寺跡	野田	寺院跡	平安～室町	河岸段丘	布目瓦、瓦器
14	藤並遺跡	天満	散布地	古墳	河岸段丘	竪穴建物、掘立柱建物、柵列、土師器、須恵器
15	天満古墳群	天満	古墳群	古墳	河岸段丘	
15-1	天満１号墳 （泣沢女の古墳）	天満	古墳	古墳	河岸段丘	円墳、横穴式石室、須恵器、耳環、刀子、ガラス玉、銙帯、人骨、県史跡
15-2	天満２号墳	天満	古墳	古墳	河岸段丘	円墳
15-3	天満３号墳	天満	古墳	古墳	河岸段丘	円墳
16	天満Ⅰ遺跡	天満	集落跡	縄文～室町	河岸段丘	竪穴建物、掘立柱建物、土坑墓、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、和鏡（花文散双鳥鏡）、椀状鉄製品、刀子
17	天満Ⅱ遺跡	天満	散布地	古墳、鎌倉	河岸段丘	土師器、瓦器
18	宗祇法師屋敷跡	下津野	旧宅		河岸段丘	碑、古井戸、県史跡
19	藤並城跡	下津野	城跡	鎌倉～室町	河岸段丘	濠、土塁
20	石ケ谷遺跡	西丹生図	集落跡	古墳～室町	丘陵裾	掘立柱建物、井戸、土坑墓、土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、瓦
21	羽釜古窯跡	土生	窯跡	中世	河岸段丘	瓦器
22	城山窯跡群	土生	窯跡	古墳～平安	丘陵裾	窯跡３基、須恵器、瓦
23	地蔵山窯跡群	土生	窯跡	古墳～平安	丘陵裾	窯跡２基、須恵器、瓦（奈良～平安時代）
24	風呂の谷窯跡群	土生	窯跡	奈良～平安	丘陵裾	窯跡４基、須恵器、瓦（奈良時代）
25	土生池遺跡	土生	散布地	旧石器、平安	山麓	ナイフ形石器、削器、掻器、石核、土師器、黒色土器
26	長楽寺跡	植野	寺院跡	平安～鎌倉	山麓	礎石建物、土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦器、輸入陶磁器、瓦、銭貨
27	八幡神社板碑	奥	碑	室町	丘陵裾	
28	八幡神社宝篋印塔	奥	石塔	室町	丘陵裾	
29	地蔵山遺跡	土生	散布地	平安	河岸段丘	
30	奥の宝塔及び宝篋印塔	奥	石塔	南北朝	河岸段丘	宝塔（文中三年銘）、宝篋印塔（文中二年銘）、県史跡
31	奥Ⅰ遺跡	奥	散布地	平安	丘陵裾	瓦器
32	**藤並地区遺跡**	**土生 明王寺 水尻**	**散布地**	**旧石器～鎌倉**	**河岸段丘**	**掘立柱建物、土坑墓群、ナイフ形石器、有舌尖頭器、土師器、須恵器、陶棺、布目瓦、円面硯、瓦器、国産陶器、山茶椀、輸入陶磁器、板碑**
33	岩室城跡	田口	城跡	中世	山頂	湯浅氏・畠山氏の城、天正13年落城、二の丸・三の丸の平坦部が残存
35	奥Ⅱ遺跡	奥	出土地	縄文	丘陵	有舌尖頭器
36	土生池南岸遺跡	土生	出土地	古墳	丘陵	須恵器甕
37	土生池須恵器窯跡	土生	窯跡	奈良	丘陵	須恵器（坏、坏蓋、高坏、壺、甕、水煙形製品）
38	野田地区遺跡	野田	寺院跡 ほか	旧石器～中世	河岸段丘、 氾濫原	竪穴建物、掘立柱建物、宝篋印塔、大溝、石核、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦、瓦器、建築材、梯子、木器、柿経、下駄など
39	湯浅城跡	熊井	城跡	中世	丘陵端	土塁、濠、康治二年湯浅宗重築城
40	小島遺跡	小島	散布地	弥生、室町	丘陵	弥生土器、石塔
42	崎山屋敷跡	井口	館跡	鎌倉	丘陵	
43	勝真山館跡	賢・船坂	館跡	中世	山頂	
有田市						
17	岩室城跡	宮原町須谷	城跡	中世	山頂	有田川町33に同じ
18	岩室遺跡	宮原町須谷	散布地	弥生	丘陵	弥生土器
22	糸我地蔵堂遺跡	糸我町中番	散布地	弥生	丘陵裾	弥生土器
39	雲雀山遺跡	糸我町中番	散布地	弥生	山腹	弥生土器
46	城跡	地蔵堂	城跡	中世	丘陵	
湯浅町						
5	湯浅城跡	青木	城跡	中世	丘陵	土塁、濠、康治二年湯浅宗重築城
6	青木Ⅰ遺跡	青木	散布地	室町	河岸段丘	瓦器
7	青木Ⅱ遺跡	青木	散布地	弥生	河岸段丘	弥生土器、土師器
8	青木Ⅲ遺跡	青木	散布地	古墳	河岸段丘	須恵器（長頸壺）
10	山田北山遺跡	山田	散布地	室町	丘陵裾	鉄槍、瓦器、明銭
11	山田廃寺	山田	寺院跡	平安	丘陵裾	蓮華文軒丸瓦
12	山田堂山遺跡	山田	散布地	弥生	丘陵裾	弥生土器
15	青木火葬墓	青木	墳墓	奈良	山腹	蔵骨器、和同開珎、帯金具、木炭
17	広保山城跡	吉川	城跡	平安	山頂	曲輪、空濠、湯浅宗重築城
21	帝の跡	山田	館跡	中世	河岸段丘	

（　　）遺跡内での調査履歴有り

和歌山県教育委員会『和歌山県埋蔵文化財包蔵地地名表』2007年3月31日発行を一部改変・補筆

これまでの発掘調査では、キャンプ地など一時的な居住施設に伴うと考えられる土坑群が検出された土生池遺跡（25）（写真１）や藤並地区遺跡でナイフ形石器や掻器・削器・石核などが発見されており、過去に野田地区遺跡（38）からも石核・掻器・削器が出土している。

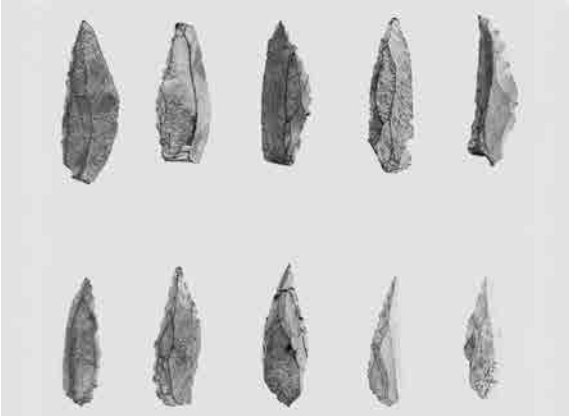


写真１　土生池遺跡出土のナイフ形石器

縄文時代の遺跡は、平野部より上流の狭小な河岸段丘上や谷あいに多く存在するが、平野部周辺では比較的少ない。草創期の遺跡として有舌尖頭器などが出土した奥Ⅱ遺跡（35）や土生池遺跡・藤並地区遺跡がある。野田地区遺跡からは後期・晩期の土器のほかに石棒が出土している。また、野田地区遺跡に隣接する天満Ⅰ遺跡（16）からも後期・晩期の土器が出土している。

弥生時代前期の遺跡としては天満Ⅰ遺跡があり、遠賀川系の弥生土器と縄文土器の系譜にある突帯文土器が伴出する竪穴建物跡が検出されている。中期には沖積平野部に田殿尾中遺跡（10）が営まれるようになる。直径 150m 程度の環濠集落で、当地域の拠点的な集落であったと考えられている。この集落は中期末葉から後期に途絶え、後期末葉には再び集落が形成されるようになり、この間断期に対応するように高地性の遺跡である岩室遺跡や小島遺跡（40）などが出現する。また、後期になると平野部においても旧吉備中学校校庭遺跡（11）が活況を呈するようになる。農耕祭祀に使われたとされる銅鐸は下流域の山上から３箇所４口が出土しており、有田市千田からは銅鐸とともに６個の大阪湾型銅戈が見つかっている。

写真２　旧吉備中学校校庭遺跡第４次調査
竪穴建物 20・22（南西から）

弥生時代後期から継続する旧吉備中学校校庭遺跡（写真２）や田殿尾中遺跡（写真３）は古墳時代初頭頃には廃絶し、集落の主体は沖積地から段丘上に移り、野田地区遺跡や天満Ⅰ遺跡周辺に広く展開するようになる。周辺部には古墳の数は少ないものの、４基の古墳からなる天満古墳群（15）が築かれている。このうち１号墳（泣沢女の古墳）は終末期に築造された円墳で、巨石積みの横穴式石室で構築されている。

奈良時代に有田川流域は、阿提（安諦・安氐）郡と称したが、大同元年（806）に「在田」に改称された。在田郡には吉備・英多などの郷があり、藤並地区周辺は吉備郷に属していたと考えられる。古代の役所である郡衙は、在田郡では明らかになっていないが、これまでの発掘調査成果などから吉備郷の野田地区遺跡周辺に存在した可能性がある。

写真３　田殿尾中遺跡出土の弥生土器

瓦や須恵器を焼成した窯跡も多く土生池窯跡（37）などが発掘調査で明らかにされており、平野部の川向には古代在田郡唯一の田殿廃寺（1）がある。平安時代後半頃から皇族・貴族を中心におこなわれるようになる熊野参詣道は、平野部の西側を通り、それと十字に交わる有田高野街道が平野部を横切っている。

中世では野田地区遺跡で護岸を伴う溝、天満Ⅰ遺跡で和鏡（写真 4）や刀子を副葬した土壙墓が見つかっている。このように藤並地区遺跡の周辺部は原始・古代より有田地方の中心的な地域であったと言える。

写真４　天満Ⅰ遺跡中世墓出土の和鏡

第 3 節　調査の経緯と経過（既往の調査）（図 3 ～ 5）

藤並地区遺跡は、1980（昭和 55）年度に海南湯浅道路の建設に際してその出入口にあたる有田インターチェンジから国道 42 号線への導入路部分について、分布調査及び試掘調査が行われた。その結果を受けて、本格的な調査が必要と判断された野田地区遺跡および藤並地区遺跡の範囲において、1980（昭和 55）年度から 1981（昭和 56）年度にかけて調査が実施された。

次いで、近畿中枢部から紀南への円滑な物資の輸送・観光資源の活性化などに伴う交通網の整備を意図した一般国道 42 号湯浅御坊道路（写真７）の建設工事に先立ち、1989（平成元）年度から 1993（平成 5）年度までの 5 箇年わたり試掘調査を含めた発掘調査が実施されている（写真５・６）。

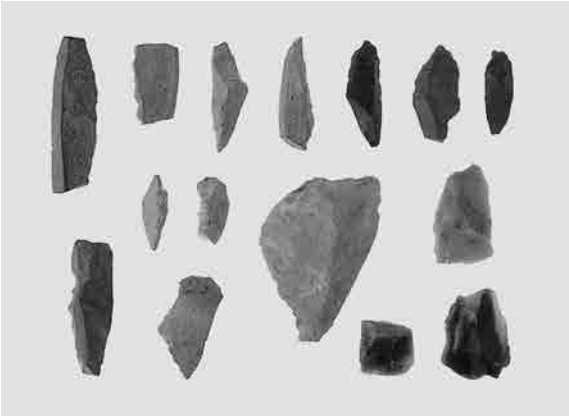


写真５　藤並地区遺跡 1991 年度 M 地区
出土の旧石器

その後、県道吉備金屋線建設工事に伴う調査では、2006（平成 18）年度は、藤並地区遺跡全体の中では北端（2006 －Ⅰ区・Ⅱ区）（写真７）ないしは北半部（2006 －Ⅲ区）に該当する範囲で調査を行っている。当該年度の調査は、3 地区合計 1, 807 ㎡について実施した。何れも、一般国道 42 号湯浅御坊道路の建設工事に先立って行われた調査地の東側に位置する。調査では、鎌倉～室町時代の粘土採掘土坑・谷状落ち・石列状遺構・水田耕作に伴う小溝群を検出すると共に、地震による噴砂を確認している。

写真６　藤並地区遺跡 1991 年度
Ｊ地区検出掘立柱建物跡

2007（平成 19）年度は、藤並地区遺跡全体の中では北半部（2007 －Ⅰ区・Ⅱ区）ないしは北東部（2007 －Ⅲ区）に該当する範囲で調査を行っている。当該年度の調査は、3 地区合計 608 ㎡について実施した。調査では、平安時代末～鎌倉時代の柱穴・土坑・井戸・溝・水田耕作に伴う小溝群を検出すると共に、2006（平成 18）年度と同様に地震による液状化の噴砂を確認している。

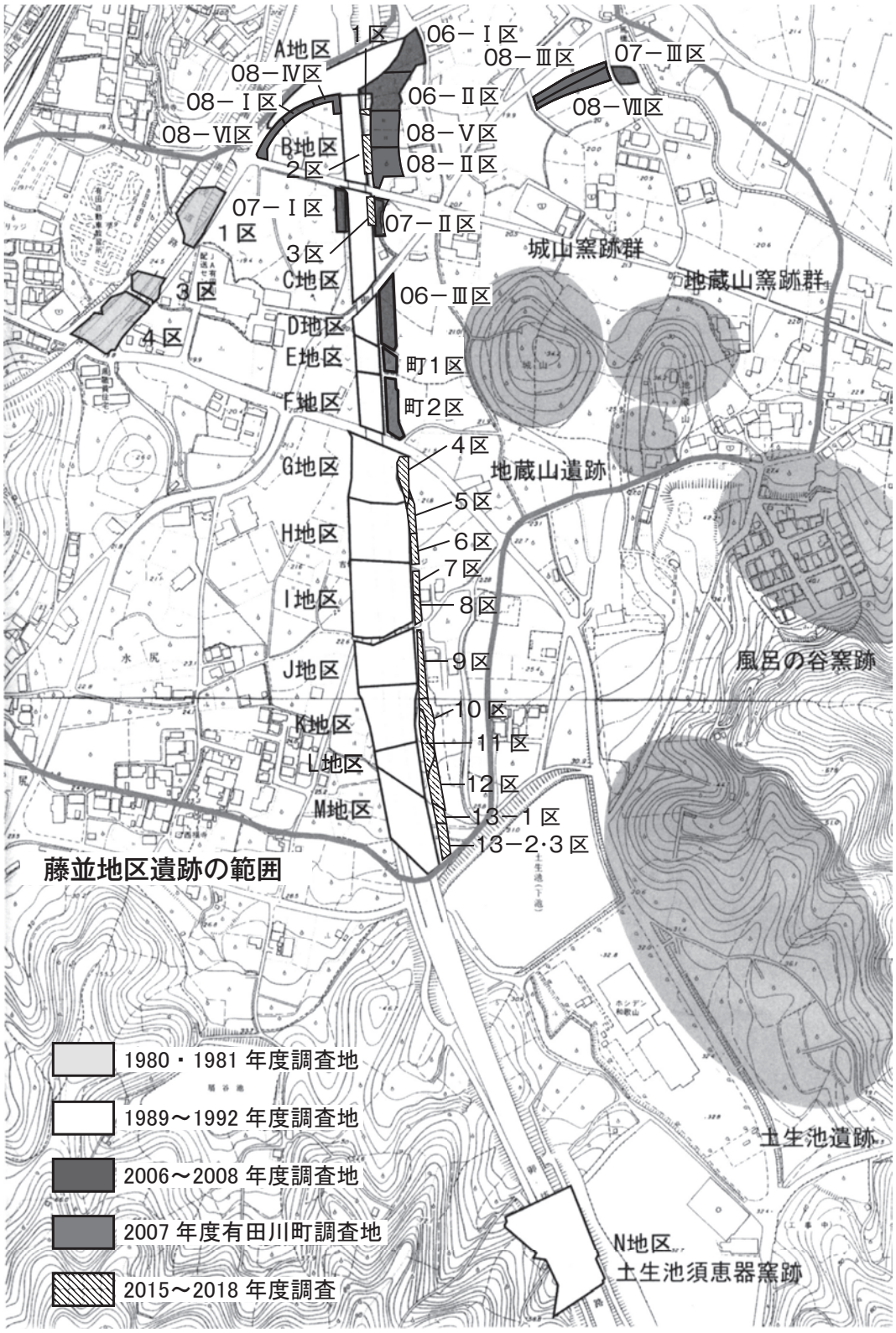


図 3　既往の調査地位置図（1：6,000）

2008（平成 20）年度は、藤並地区遺跡全体の中では北半部（Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ区）ないしは北東端（Ⅲ・Ⅶ区）に該当し、一般国道 42 号湯浅御坊道路の建設工事に先立って行われた調査地の東西両側に位置する。このことから 2007（平成 19）年度と同様に旧石器時代、並びに奈良時代から中世における遺跡周縁部の土地利用の一端や北東端での遺跡の在り方がが解明されるところであった。当該年度の調査は、7 地区合計 2, 237 ㎡について実施した。

写真 7　2006－Ⅰ区調査遺構全景と湯浅御坊道路（北北東上空から）

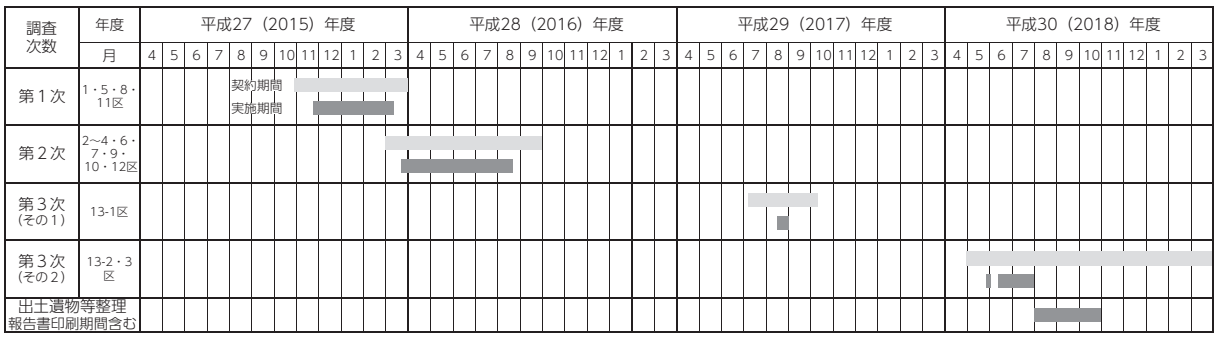
なお、2008（平成 20）年度の調査に先立って、2007（平成 19）年度に有田川町教育委員会により 2006 －Ⅲ区の南側において調査が実施されている（町 1 区・町 2 区）。調査は、湯浅御坊道路の 4 車線化事業に伴う町道拡幅工事に先立ち実施されたものである。調査では、弥生時代前期の可能性が考えられる自然流路、奈良時代から平安時代の溝 1 条、中世の水田区画などが検出された。奈良時代から平安時代の溝からは、須恵器の坏・甕・香炉蓋、丸瓦・平瓦、陶棺などが出土している。この内、須恵器の香炉蓋は、鈕の形状が塔の相輪形を呈している点が特徴である。

（4 車線化に伴う調査）

一般国道 42 号（湯浅御坊道路）は御坊市を起点とし、有田郡有田川町に至る総延長約 19㎞ の一般有料道路である。現在供用中の湯浅御坊道路は 2 車線であるため、安全性・走行性の向上、災害時の代替機能の強化など地域の発展に貢献することを目的として 4 車線化事業が西日本高速道路株式会社により実施されることになった。事業予定地は有田川町土生・明王寺・水尻地内において周知の埋蔵文化財包蔵地の藤並地区遺跡を縦断するもので、供用中の道路建設に伴う発掘調査において古代の掘立柱建物跡などが検出された地区の隣接地に該当する。このため、今回の事業予定地においても遺構の展開が予想できることから記録保存のための発掘調査を実施するに至った。

4 車線化事業に伴う発掘調査業務は、これまで 3 次にわたり、いずれも当文化財センターによって実施している。第 1 次発掘調査は調査面積が 699 ㎡で、契約期間が平成 27 年 10 月 29 日～平成 28 年 3 月 31 日（内、発掘調査期間は平成 27 年 11 月 25 日～平成 28 年 3 月 8 日）である。調査では奈良時代の溝や奈良時代から鎌倉時代にかけての自然流路などの遺構を検出し、遺物では須恵器・土師器・瓦

表 2　発掘調査・出土遺物等整理業務工程表



器などの土器類のほかサヌカイト製石器剥片などが出土した。

第２次発掘調査は調査面積が 2, 195 ㎡で、契約期間が平成 28 年３月１日～平成 28 年９月 30 日（内、発掘調査期間は平成 28 年３月 25 日～平成 28 年８月 22 日）である。調査では中世以前の自然流路や土坑・水田面を検出した。また、水田面では耕作時の人や牛の足跡を確認している。遺物には須恵器や土師器・瓦器・国産陶磁器・輸入磁器などの土器類のほか石鏃などが出土した。

第３次発掘調査（その１）は調査面積が 118. 6 ㎡で、契約期間が平成 29 年７月３日～平成 29 年 10 月 10 日（内、休止期間が平成 29 年７月 21 日～平成 29 年８月 16 日、発掘調査期間は平成 29 年８月 17 日～平成 29 年８月 31 日）である。調査では中世の溝・土坑、江戸時代の水田に伴う耕作痕を検出し、遺物では土師器・瓦器・国産陶磁器などが出土した。

第３次発掘調査（その２）は、平成 30 年３月 30 日付け関和工第 1085 号で西日本高速道路株式会社関西支社和歌山工事事務所長より和歌山県教育委員会に発掘調査の依頼があり、平成 30 年４月２日付け文第 04020003 号で一般国道 42 号（湯浅御坊道路）４車線化事業に伴う藤並地区遺跡（第３次）発掘調査及び出土遺物等整理業務の実施計画書提出の依頼があったため、平成 30 年４月 16 日付け和文セ第 66 号で実施計画書を和歌山県教育委員会に提出した。

これを受けて、平成 30 年４月 21 日付け文第 04020003 号の（2）で和歌山県教育委員会より委託契約を締結するよう依頼があり、平成 30 年４月 30 日付けで西日本高速道路株式会社関西支社和歌山工事事務所（以下、「ネクスコ西日本」という。）と一般国道 42 号（湯浅御坊道路）４車線化事業に伴う藤並地区遺跡（第３次）発掘調査及び出土遺物等整理業務の委託契約を締結した。

発掘調査の内、発掘調査工事は、「藤並地区遺跡第３次発掘調査工事」として株式会社田中建設が受注して実施した。なお、委託契約締結後にネクスコ西日本から平成 30 年６月１日～平成 30 年６月 11 日の間の休止期間の指示があったため、現地調査は休止期間を挟んで平成 30 年５月 29 日～平成 30 年７月 31 日まで実施することとなった。

第Ⅱ章　発掘調査・出土遺物整理の方法

第１節　調査現場の記録作業

藤並地区遺跡の調査に伴い、下記に示す記録作業を行った。

1　写真撮影作業

記録保存としての写真撮影作業は、中判カメラ（6 × 7 判：白黒フィルム・カラーポジフィルム）・小判カメラ（35 ㎜判：白黒フィルム・カラーポジフィルム）により、主に発掘調査の状況、検出遺構・遺物の出土状況、断面土層等を撮影した。また、小型デジタルカメラにより作業状況や作業工程をメモ用の記録画像として撮影している。平成 29 年度以降は、記録資料のデジタル化に伴い、35 ㎜フルサイズのデジタルカメラ等による撮影を行っている。

2　実測図作成作業

記録保存としての実測図作成作業は、各遺構面の検出遺構の遺構位置全体図（縮尺＝１／100）・全体の遺構平面実測図（縮尺＝１／20・１／50）・個別遺構や遺物の出土状況図（縮尺＝１／10・１／20）・個別遺構の断面土層図（縮尺＝１／20）を作成した。

また、調査地区の遺存状態の良好な壁面に対して断面土層図（縮尺＝１／20）などを記録として作成した。

3　基準点測量・航空写真撮影

調査地の遺構図面作成や遺物の取上げ等のため、2015（平成 27）年度に設置した 4 級基準点から国土座標第Ⅵ系（世界測地系）により各年度各地区内に地区割の設置を実施した。併せて、4 級基準点には水準測量も行っている。

発掘調査により検出した遺構は、2015（平成 27）年度の第 2 次調査の 4・6・7・9・10・12 区においてラジコンヘリコプターで航空写真図化測量及び調査地全体の航空写真撮影を行った。

基準点の設置は、2015（平成 27）年度の第 1 次調査において「藤並地区遺跡第 1 次発掘調査に伴う基準点委託業務」として有限会社　清水測量に、航空写真測量は第 2 次調査において「一般国道 42 号（湯浅御坊道路）4 車線化事業に伴う藤並地区遺跡第 2 次発掘調査に係る航空写真測量委託業務」として株式会社　共和に業務委託して実施した。

第２節　調査地の位置と地区割（図 4・5）

調査の地区割は、財団法人和歌山県文化財センター「発掘調査マニュアル（基礎編）」（2006 年 4 月）に準拠して、今回の一連の調査に供するものを 2006（平成 18）年度に作成した。藤並地区遺跡の北側で 2006（平成 18）年度の上半期に調査を実施した野田地区遺跡の区画割を延長させて使用している。

調査地の地区割は、既往の調査および今後の調査に共通して使用できるように有田川町発行の縮尺 1／2, 500 の「有田川町吉備都市計画図」11-3・11-4（平成 25 年撮影・現調、平成 26 年測図：アジア航測株式会社）を基本として、世界測地系（国土座標第Ⅵ系）図面を利用して行った。

調査地の地区割は、国土座標第Ⅵ系（世界測地系）を使用し、野田地区遺跡・藤並地区遺跡を網羅する範囲の北東に基点（X ＝－ 214. 0 ㎞、Y ＝－ 73. 3 ㎞）を設けた。この基点から西方向と南方向にそれぞれ 100 ｍの大区画（100 ｍ方眼）を設定した。これらの呼称は、基点から西方向に A ～ Y（ア

ルファベット大文字)、基点から南方向に１～25（算用数字）とした（図４　区画呼称例　E12)。次いで、100ｍ方眼の大区画を625等分し、４ｍ方眼の区画割（小区画）を行なっている。小区画の呼称は、各々の大区画の北東隅を基点として、西方向にａ～ｙ（アルファベット小文字)、南方向を１～25（算用数字）とした（図５　小区画呼称例　h21)。

実測基準点および遺物の取上げは、上記の地区割・区画割（小区画）を使用している。全て、各年度の藤並地区遺跡調査の地区割に続くものである。

なお、方位は座標北を使用し、標高は東京湾標準潮位Ｔ．Ｐ．＋を使用した。

図４　調査範囲と地区割（100 m区画）（1：5000）

第３節　出土遺物等資料の整理

1　出土遺物応急整理等

応急整理作業

出土遺物については、調査の進捗に伴い、調査方法の判断資料として時期決定を行い、調査を円滑に進めていく必要があるため、当文化財センター整理棟において出土遺物について応急整理作業を実施した。洗浄作業についてはほぼ全てを行った。

また、出土遺物の総体的な把握と調査報告書作成までの収納・管理を目的とした出土遺物登録台帳の作成作業を行い、ほぼ全てを完了した。

2　出土遺物等整理業務

調査で出土した遺物は、応急的な整理のみであったため、調査報告書作成に伴い一連の整理作業を行うと共に、遺構図面・遺構写真などの調査資料の整理を行い、資料登録台帳などを作成した。

出土遺物は、通常の遺物収納コンテナ（28ℓ）にして12箱である。出土遺物の整理は、財団法人和歌山県文化財センター『発掘調査マニュアル（基礎編）』に準拠して、全遺物を対象に遺物洗浄・遺物の調査コードと出土遺物登録番号の注記・遺物内容点数の集計・接合作業を行った。

基礎的な作業を経た主要遺物を対象に、遺物充填材による補強・復元・遺物の実測図作成（写真８）・実測遺物台帳登録・遺物実測図トレース図作成（写真９）・トレース図レイアウト・遺物実測図の整理・遺物写真撮影・遺物写真の整理、遺物内容の登録集計データ等入力作業を行った。さらにこれらの遺物の中から、各々の遺構・整地土・堆積層の時代・性格の理解に必要と思われる主要なものを抽出して調査報告書に掲載する図面原稿を作成した。

遺構図面の整理は、台帳登録・報告書用図面のデジタルトレース作図・レイアウトを行い、調査報告書に掲載する図面原稿を作成した。

遺構写真・遺物写真撮影の整理は全写真を対象に、アルバム収納・登録番号の記載作業を行った。デジタル画像データにはファイル毎に内容を記入して保存している。

写真８　出土遺物の実測図作成作業

写真９　遺物実測図のトレース図作成作業

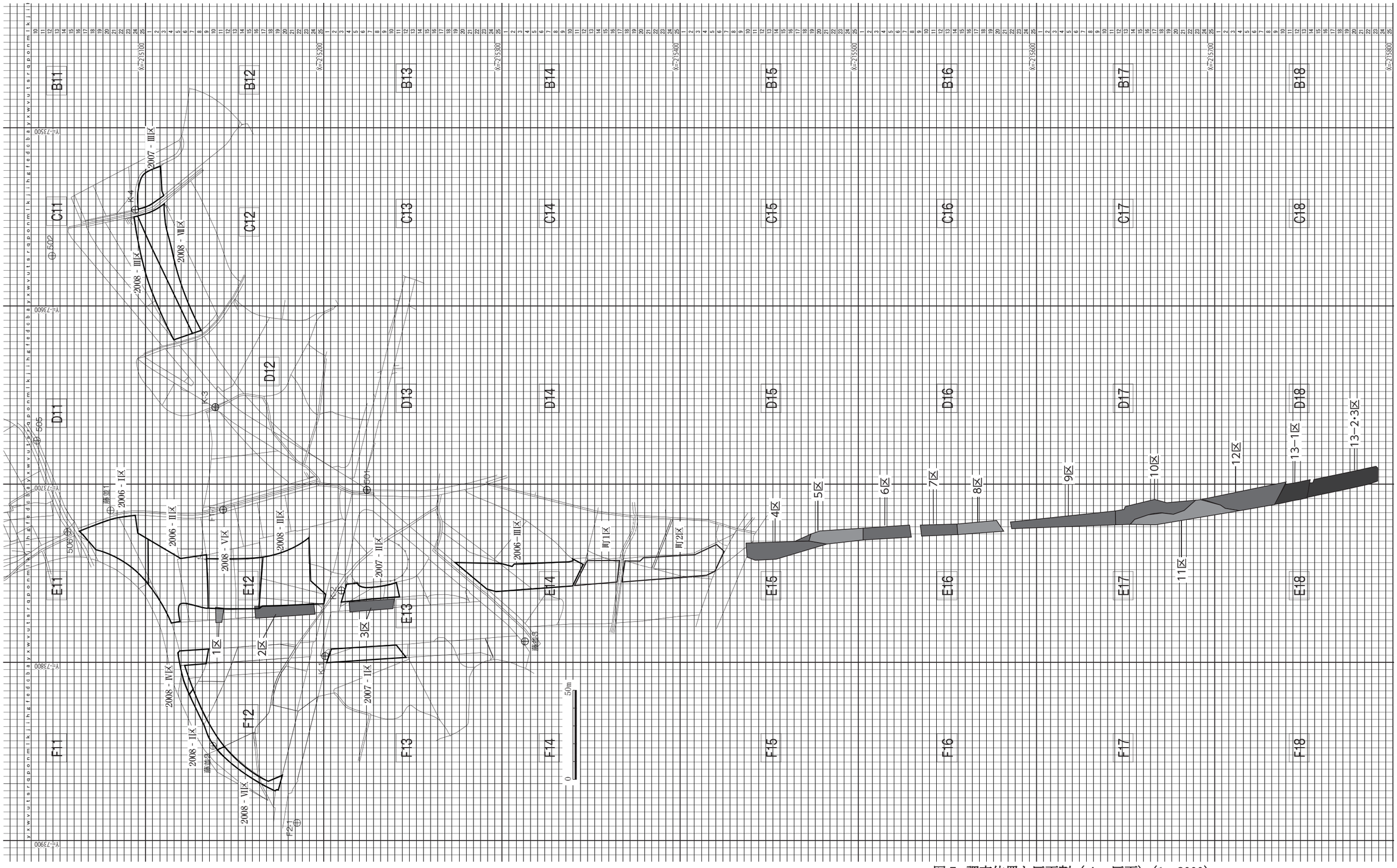


図５　調査位置と区画割（４ｍ区画）（1：2000）

第Ⅲ章　各地区の調査成果と出土遺物

第１節　各地区の調査成果

１　調査の概要

第１次～第３次調査の対象地は、一般国道 42 号（湯浅御坊道路）に沿って南北に細長く、道路・用水路などにより分断されているため、13 箇所に分割して調査の便宜上北端から順に１～ 13 区と呼称した。第１次調査では１・５・８・11 区の４箇所について、第２次調査では２・３・４・６・７・９・10・12 区の８箇所について調査を実施した。第３次調査は、最も南の 13 区が対象となるが、調査可能な範囲から着手することになり北側から約 1/3 程度の面積を 13-1 区とし、南側の残りの面積を 13-2・3 区と呼称して調査を行った。

これらの内、隣接店舗や民家との通路の確保、掘削排土の仮置場確保により、５区を 5-1 区（北側１／３)・5-2 区（南側２／３)、８区を 8-1 区（北側２／３)・8-2 区（南側１／３)、11 区を 11-1 区（北側半分)・11-2 区（南側半分)、13 区を 13-1 区（北側１／３)・13-2 区（真ん中１／３)・13 － 3 区（南側１／３）と呼称して調査を行った。

なお、2015（平成 27）年度の第２次調査の４・６・７・９・10・12 区においてラジコンヘリコプターによる航空写真測量及び調査地全体の航空写真撮影を行った。

調査地の現地形は、盛土による宅地化や果樹園などによりかなり改変されているが、鎌倉時代から室町時代の旧地形は大きく南西から北東方向に緩やかに傾斜する。

詳細に見ると、現地表の高さは後世の開発に伴い変化しているが、大半の地区に共通して中世遺物包含層（旧水田耕作土）が認められることからこれらの耕作土の下部が往時の旧地形を表すものと考えられる。

各調査区の遺構面は、鎌倉時代から江戸時代に至る水田耕作土層を主体として、遺構検出面は１面のみが確認できた。遺構の主だったものとして、鎌倉～室町時代の土坑・谷状落ち込み・自然流路などを、13 － 1 区では水田耕作に伴う小溝群を検出すると共に、一部で地震による液状化の噴砂を確認した。なお、大半の地区において人間・牛の足跡と考えられる踏み込み（状）遺構を検出した。

出土遺物の大半は、遺物包含層（旧水田耕作土）や自然流路から出土した鎌倉時代の土器類で占められるが、室町時代の土器類も少量ある。その他、弥生時代の石鏃・砂岩製台石、奈良時代の土師器・須恵器・瓦がある。また、弥生時代と考えられるサヌカイト製剥片が数点出土している。

２　１区（図６・７・39、写真図版１・15）

調査面積は 22 ㎡である。

(1) 基本層序

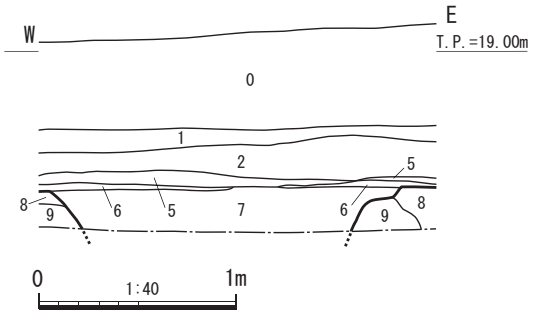
１区の現況は、県道吉備金屋線道路改良工事の際に水田耕作土の上に盛土を行った荒地である。

(2) 検出遺構と出土遺物

遺構検出面の標高は 18. 30 m前後を測り、101 踏み込み状遺構を１基検出した。

101 踏み込み状遺構

101 踏み込み状遺構は、調査区の北端で検出した。北側は調査区外に延びるため全容は不明である。



0. 盛土　2.5Y4/4 オリーブ褐色礫
1. 2.5Y4/1 黄灰色シルト
2. 7.5Y5/2 灰オリーブ色粘質シルト
5. 2.5Y5/1 黄灰色シルト、しまり有り
6. 5Y6/1 灰色シルト、しまり有り、鉄分沈着
7. 101 踏み込み状遺構　5Y6/1 灰色粘質シルト
鉄分沈着、マンガン粒含む
8. 基盤層　2.5Y6/1 黄灰色粘質シルト
マンガン粒を含む
9. 基盤層　2.5Y7/1 灰白色粘質土と
2.5Y5/4 黄褐色粘質土が混じる

図６　１区　調査区北壁断面土層図

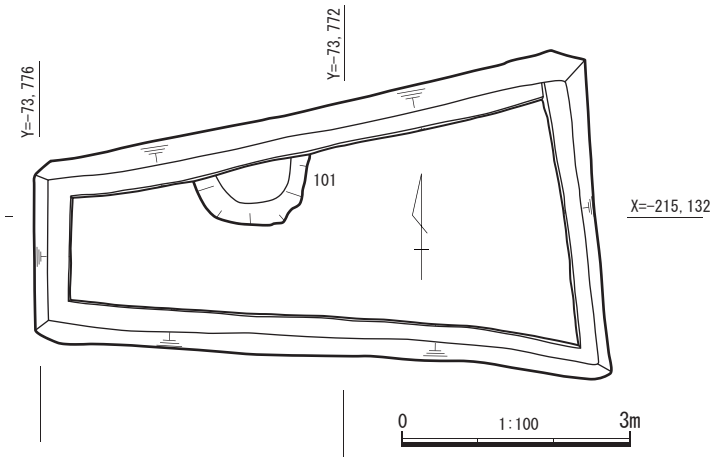


図７　１区　調査区全体図

遺構の輪郭は明確でないが、平面規模は、短軸（南北）1.08 m以上、長軸（東西）1.60 m、残存の深さは0.15 mを測る。

東側に隣接する2006-Ⅱ区でも同様の遺構が検出されている。

遺物は、出土していない。

(3) 出土遺物

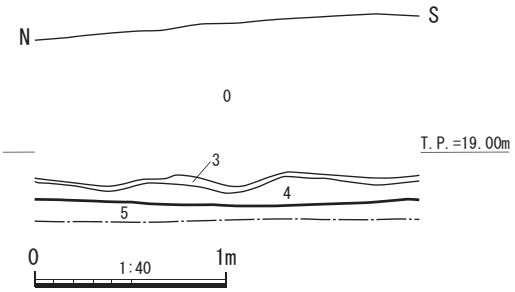
遺物は、遺構検出面の上位層や101踏み込み状遺構以外から鎌倉時代の土師器皿11点、土師器土釜2点、瓦器椀16点（19）、東播系須恵器捏鉢2点、江戸時代の備前焼擂鉢1点、陶器1点、磁器2点、瓦1点、合計37点が出土した。

3　２区（図８・９・39・40、写真図版２・15・16）

調査面積は112 ㎡である。

(1) 基本層序

２区の現況は、柑橘畑である。柑橘畑に転作する前は水田であったと思われ、耕作土の一部が残存していた。この状況は、耕作土から山土に置き換えられたと考えられる。その下層は、中世と考えられる水田耕作土層が２層堆積する。さらにその下位層は無遺物層となり基盤層である。従って、最上層の柑橘畑の山土を０層、現代水田耕作土層を第１層（10YR6/1 褐色シルト）、床土を第２層（2.5Y6/1 黄灰色シルト）、中世水田耕作土層２層分を第３層（2.5Y6/2 黄灰色シルト）、第４層（2.5Y7/1 灰白色シルト）とし、無遺物層である基盤層を第５層



0. 盛土　山土
3. 2.5Y6/2 灰黄色シルト、0.5 ～ 1 cm大の
5YR4/1 褐灰色マンガン粒が３～５% 入る
4. 2.5Y7/1 灰白色シルトに 2.5Y7/6 明黄褐色
シルトが混じる
5. 基盤層　10YR7/8 ～ 8/8 黄橙色シルト～粘土

図８　２区　調査区東壁断面土層図

(10YR7/8 ～ 8/8 黄橙色シルト～粘土)、第 6 層 (5Y7/1 灰白色粘土)、第 7 層 (第 5 層と酷似、第 5 層より黄色が若干濃い粘土) とした。

(2) 検出遺構

掘削は、基本的に第 1 次調査及び過去の隣接地における調査データに基づき、機械掘削と人力掘削を行った。今回の調査区の大半が中世～江戸時代の水田耕作土層もしくは自然流路 (湿地状の地形) となっていた。

この地区では、中世水田耕作土層と考えられる第 3 層・4 層上からの検出遺構は皆無であった。第 3 層上では、現代の水田に伴うと考えられる西北西―東南東方向の幅 0. 3 ～ 0. 4 mの暗渠排水溝を約 1. 0 ～ 1. 5 m間隔で検出した。

(3) 出土遺物

第 3・4 層の遺物包含層 (中世水田耕作土層) 等からは鎌倉時代の土師器皿 10 点・捏鉢 1 点、瓦器椀 79 点・小椀 1 点・小皿 10 点 (25)、東播系須恵器捏鉢 1 点、山茶碗 1 点 (27) の遺物に混じって、奈良時代の土師器 8 点、須恵器坏 11 点・皿 2 点・蓋 4 点・壺 3 点・甕 17 点 (7)、平瓦 1 点、器種不明金属 1 点も出土した。合計 150 点の遺物が出土した。

4　3 区 (図 10・11・12、写真図版 3)

調査面積は 79 ㎡である。

(1) 基本層序

3 区の現況は、柑橘畑である。基本的な層序は 2 区と同様であるが、中世水田耕作土層に相当する第 3・4 層が確認できない。上層から厚み 0. 8 ～ 1. 0 mの 0 層 (盛土)、現代水田耕作土層 (第 1 層＝耕作土、第 2 層＝床土)、基盤層 (第 5・6 層) である。

(2) 検出遺構と出土遺物

遺構は基盤層上で検出した。南側では円形あるいは不整形の土坑を 3 基検出した。また、これらの土坑の周辺では、2 区でも検出した現

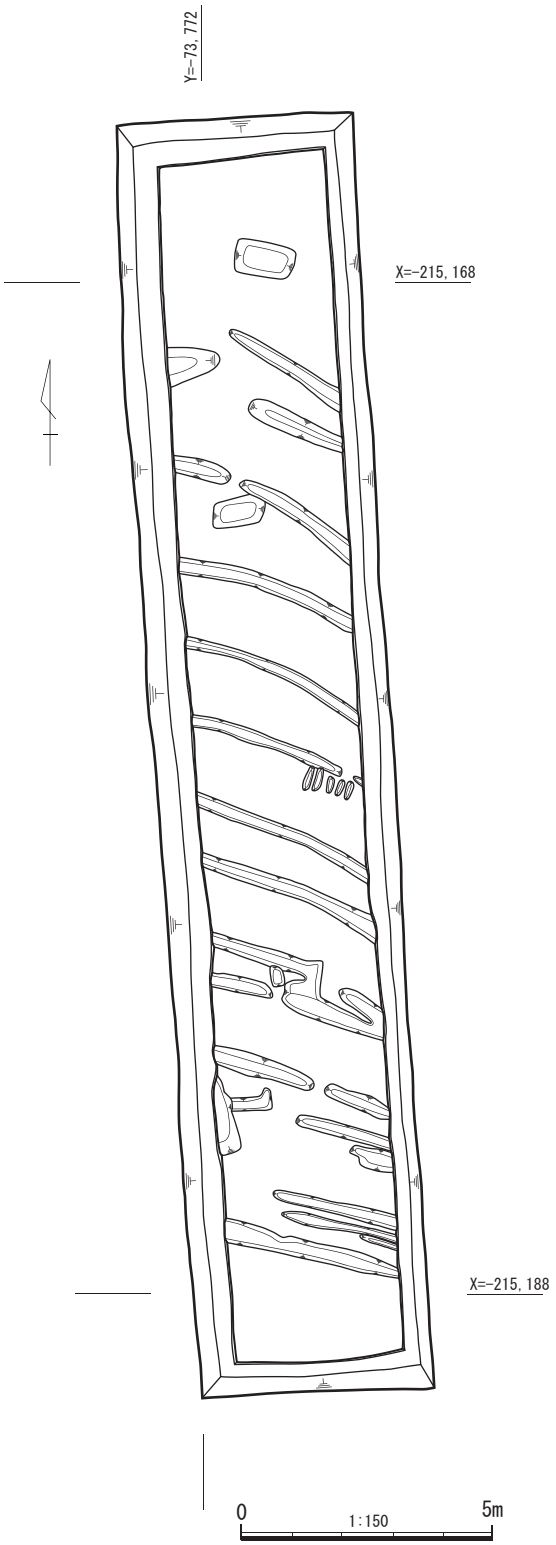


図 9　2 区　調査区全体図

代水田耕作土層に伴う暗渠排水溝を西南西―東北東方向で検出した。

自然流路

調査区の北端では自然流路の一部を検出し、この自然流路は調査区西壁では幅 6. 0 m以上を測り、北側の調査区外に落ち込む。堆積土は 4 層に分層でき、基本的には灰色系の粘土である。

301 土坑（図 12）

301 土坑は、調査区の南側に位置し、平面形はほぼ円形を呈する。平面規模は、短軸（南北）1. 36 m、長軸（東西）1. 40 m、残存の深さは 0. 23 mを測る。堆積埋土は 10YR3/1 黒褐色粘土に 10YR6/1 褐灰色シルトと 10YR8/6 黄橙色シルトがブロック状に混ざり、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

遺物は、出土していない。

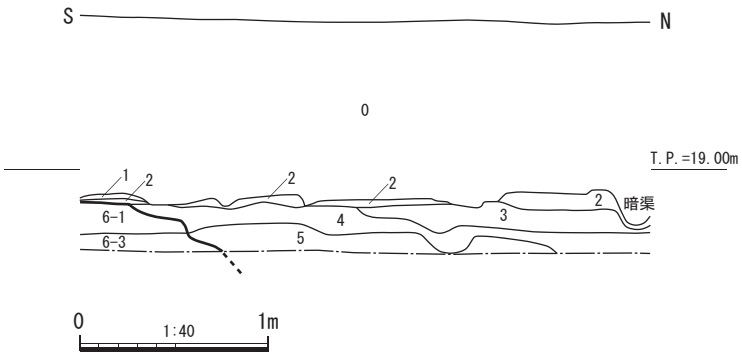
302 土坑（図 12、写真図版 3）

302 土坑は、調査区の南端、301 土坑の南西側に位置し、北西側が暗渠排水溝に、西側が調査区側溝掘削のため全容は不明であるが、平面形はやや不整形である。平面規模は、短軸（南北）1. 34 m、長軸（東西）1. 50 m以上、残存の深さは 0. 22 mを測る。堆積埋土は、301 土坑と同様である。

遺物は、出土していない。

303 土坑

303 土坑は、調査区の南端南東隅に位置し、東側と南側が調査区外に延びるため全容は不明である。平面規模は南北 1. 54 m以上、東西 2. 72 m以上、残存の深さは 0. 33 mを測る。堆積埋土は、301 土坑と同様である。



0. 盛土
1. 水田耕作土　耕土の残りと思われ、還元色（暗灰色）に発色する
2. 床土　2. 5Y7/6 明黄褐色シルト～粘土と 5Y7/1 灰白色粘土の混層
3. 自然流路　5Y7/1 灰白色粘土と 10YR7/8 黄橙色シルトの混層
4. 自然流路　10YR6/1 ～ 7/1 褐灰色～灰白色粘土
5. 自然流路　基本的に 10YR4/1 褐灰色粘土と N6/1 灰色粘土と 2. 5Y7/6 明黄褐色シルトの混層がブロック状に入る、10YR4/1 褐灰色粘土の大きいブロックが多量に入る

6-1. 基盤層　N5/0 ～ 6/0 灰色粘土
6-3. 基盤層　N6/0 ～ 7/0 灰色～灰白色粘土

図 10　3 区　調査区西壁断面土層図

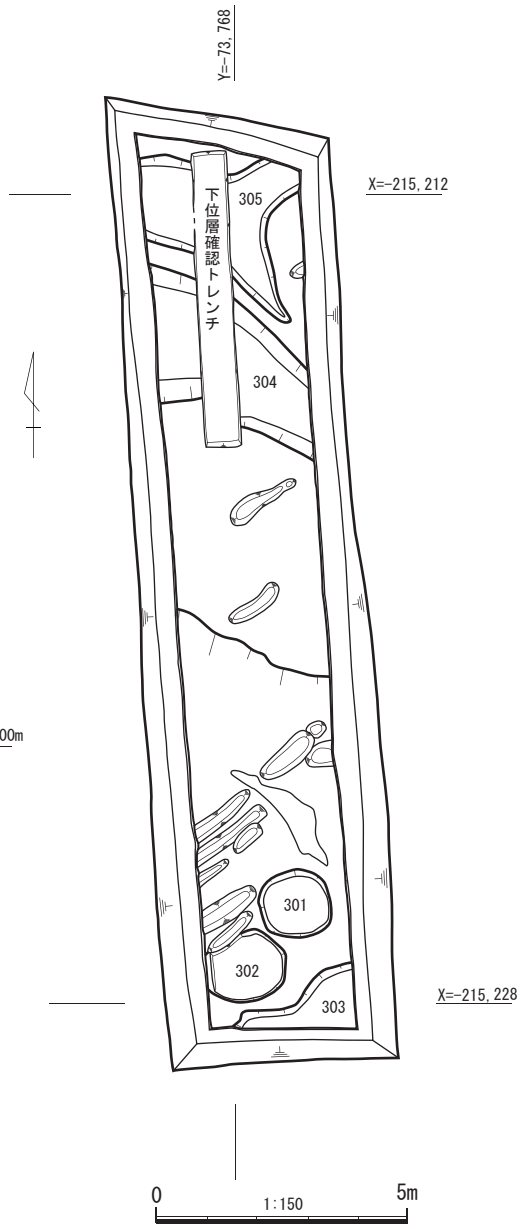


図 11　3 区　調査区全体図

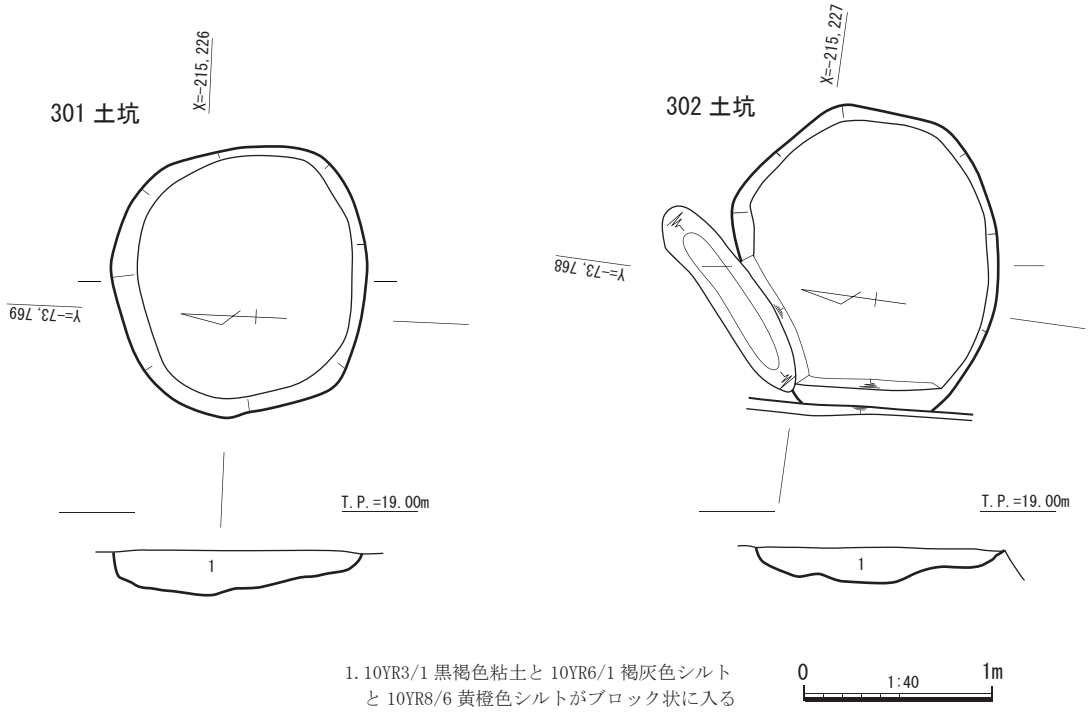


図 12　3 区　301・302 土坑実測図

遺物は、出土していない。

(3) 出土遺物

出土遺物は皆無であった。

5　4区（図 13・14・40、写真図版 4・16）

調査面積は 289 ㎡　である。

(1) 基本層序

４区の現況は、柑橘畑である。最上層は厚さ 1.0 ～ 1.1 mの第 0 層（盛土）で、その下層は中世遺物や奈良時代の須恵器を含む第 4 層（N7/0 灰色シルト）である。この層は、2 区で確認した第 4 層に類似するものと考えられる。さらにその下層は基盤層と考えられる第 5 層（2.5Y8/3 ～ 8/4 淡黄色シルト～粘土）、第 6 層（2.5Y8/6 ～ 8/8 黄色粘土）である。なお、第 1・2 層に当たる現代水田耕作土層の耕作土と床土は北側で一部を確認することができたのみである。

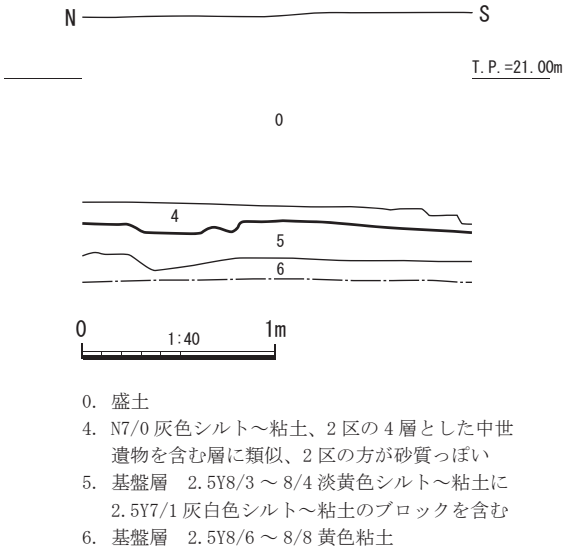


図 13　4 区　調査区東壁断面土層図

(2) 検出遺構と出土遺物

土坑

調査区の北側で確認した第 5 層（基盤層）上面で土坑を 6 基検出した。平面形は長楕円及び不整形を呈する 0.3 ～ 0.8 mの規模であった。堆積埋土は何れも 2.5Y7/1 灰白色微砂混じりシルトであった。

これらの土坑の内の2基からは、瓦器椀等の細片が出土した。堆積埋土が何れも同様であることから検出した全ての土坑は中世の時期に帰属するものと考えられる。

401土坑(図15、写真図版4)

401土坑は、調査区北側中央に位置し、南北に長いやや歪な長楕円形を呈する。平面規模は、短軸（東西）0.50 m、長軸（南北）1.15 m、残存の深さは0.14 mを測る。

遺物は、鎌倉時代の土師器皿4点、瓦器椀2点、合計6点が出土した。

402土坑(図15、写真図版4)

402土坑は、調査区の北西隅に位置し、南北に長いやや歪な楕円形を呈する。平面規模は、短軸(東西)0.44 m、長軸(南北)0.60 m、残存の深さは0.14 mを測る。

遺物は、出土していない。

403土坑(図15、写真図版4)

403土坑は、調査区の北側西端に位置し、北東―南西に長い歪な形状を呈する。平面規模は、短軸（北西―南東）0.32 m、長軸（北東―南西）0.95 m、残存の深さは0.18 mを測る。

遺物は、出土していない。

405土坑(図15、写真図版4)

405土坑は、調査区の北側西端に位置し、北東―南西に長い歪な形状を呈する。平面規模は、短軸（北西―南東）0.68～0.80 m、長軸（北東―南西）

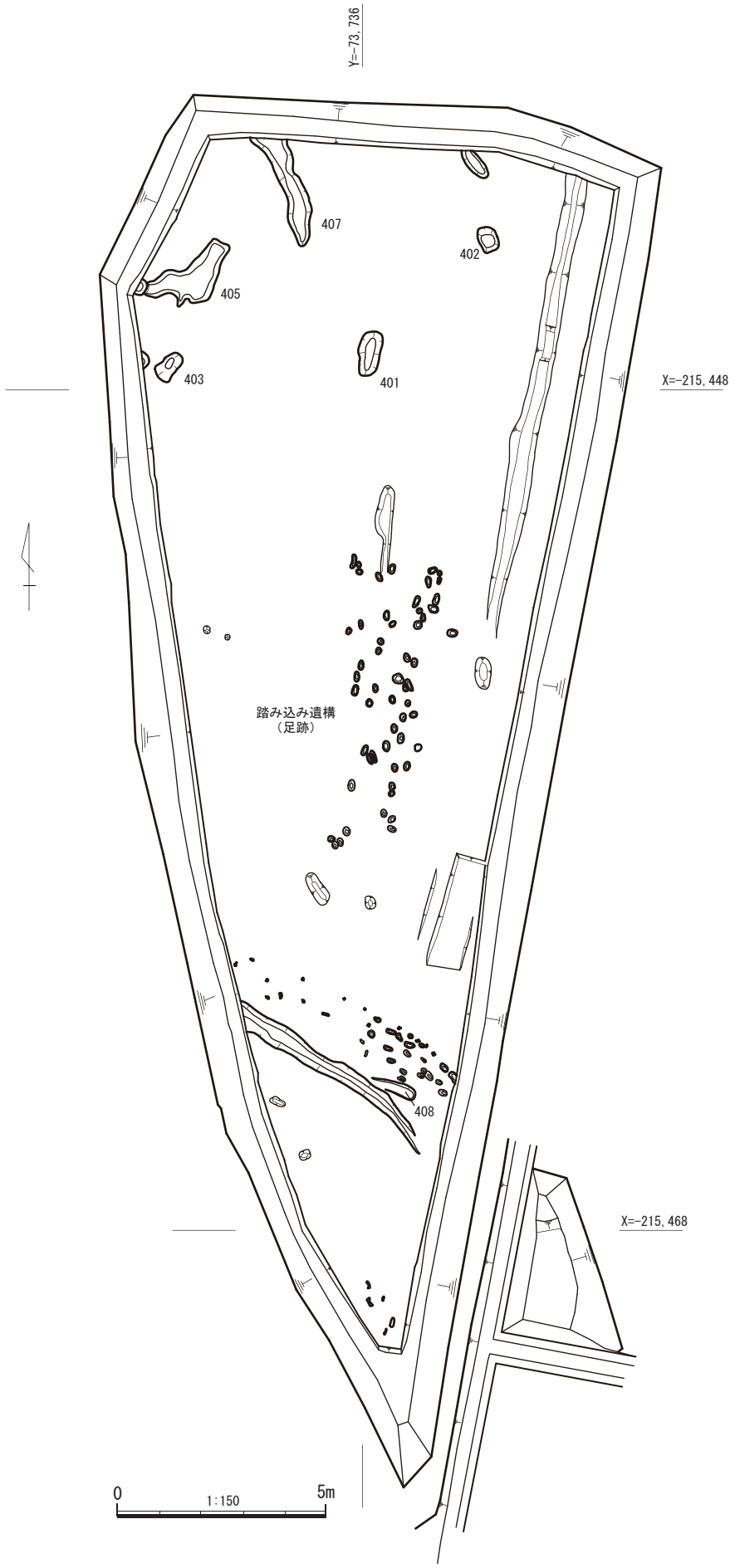


図14　4区　調査区全体図

1.90 m、残存の深さは0.11 mを測る。

遺物は、鎌倉時代の瓦器椀5点が出土した。

408土坑（図15）

408土坑は、調査区の南側、東寄りに位置し、北西―南東に長いやや歪な長楕円形を呈する。平面規模は、短軸（北東―南西）0.30 m、長軸（北西―南東）1.30 m、残存の深さは0.09 mを測る。

遺物は、出土していない。

踏み込み遺構

調査地の中央で踏み込み遺構（足跡）を多数検出した。踏み込み遺構は、南北方向の歩行痕跡であった。また、404・406踏み込み遺構からも瓦器椀各1点、他踏み込み遺構から奈良時代の平瓦1点が出土した。このことから、中世の水田跡と考えられる。

調査区の南端は湿地状となり、南側方向に落ち込んでいる。この落ち込みの肩際に沿って北西―南東方向の踏込み遺構と牛の足跡を検出した。

(3) 出土遺物

第4層の遺物包含層（中世水田耕作土層）等からは鎌倉時代の土師器皿2点・小皿3点・器種不明2点、瓦器椀26点・小皿7点、東播系須恵器捏鉢4点（28・29）・龍泉窯系青磁碗1点（36）、平瓦3点・丸瓦1点の遺物に混じって、弥生時代と考えられるサヌカイト剥片1点、奈良時代の須恵器坏2点・蓋2点・壺1点・甕1点、平瓦1点、平安時代の須恵器甕2点も出土した。合計59点の遺物が出土した。

その他、暗渠撹乱から奈良時代の須恵器甕1点が出土した。

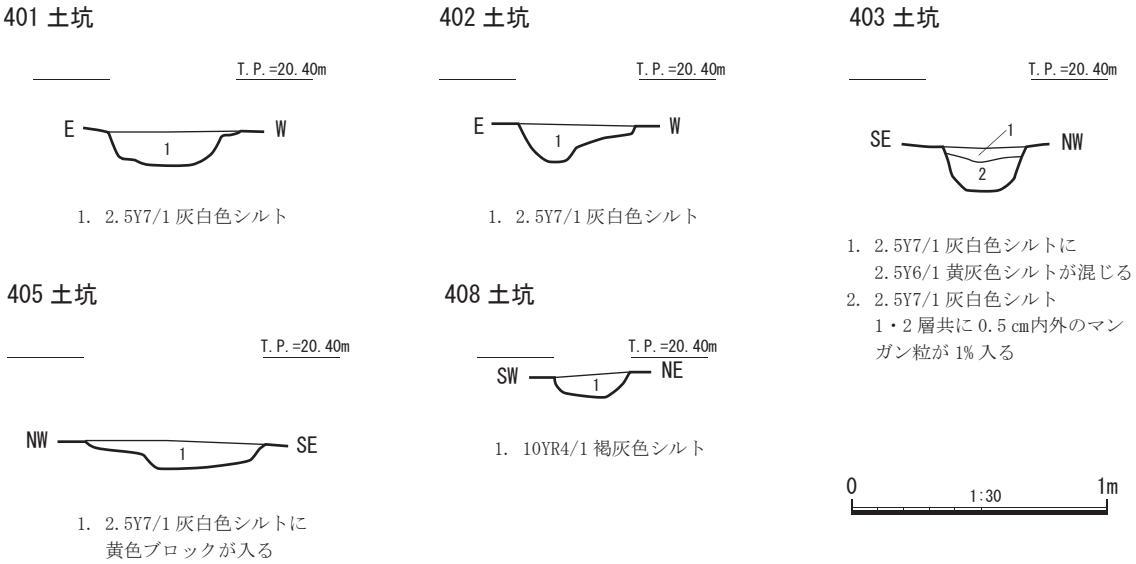


図15　4区　401・402・403・405・408土坑断面土層図

6　5区（図16・17・18、写真図版５）

調査面積は191㎡である。

(1) 基本層序

５区の現況は、アスファルト舗装の駐車場用地である。

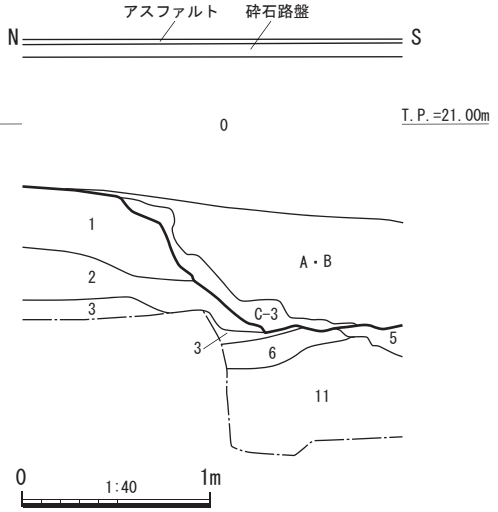
(2) 検出遺構

遺構検出面の標高は20.50ｍ前後を測り、調査区の大半が近現代の粘土採掘土坑により撹乱されていた。

粘土採掘土坑

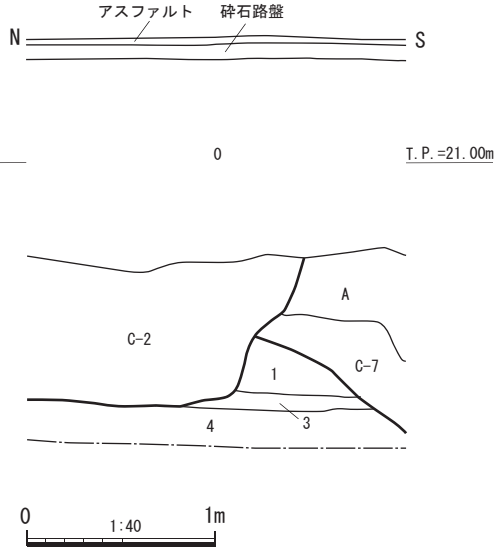
粘土採掘土坑は、調査区のほぼ全域で検出した。土坑は調査区壁面断面土層で見る限り９区画に分かれ、順次、粘土採掘と埋戻しを行っているようである。堆積埋土は、炭化物に瓦・焼土が混じったもので埋めたもの、岩盤を砕いた礫で埋めたもの、両方が混ざったもの、粘質の土で埋めたものの４種類がある。出土した瓦は全て近現代のものである。

地元の方の話しでは、湯浅御坊道路よりも西側に昭和30年代まで瓦屋が操業しており、材料の粘土を周辺で採掘していたとの事である。粘土採掘土坑の基底部は標高20.00ｍ前後を測り、粘質の土の間に砂が筋状に入っており、地震による液状化現象によって発生した噴砂の痕跡と考えられる。



0. 盛土
A. 粘土採掘土坑　10YR5/6 黄褐色、5～30㎝大の礫層
B. 粘土採掘土坑　炭層、瓦・焼礫・焼土を含む
C-3. 粘土採掘土坑　2.5Y5/4 黄褐色粗砂に10Y6/1 灰色粘質シルトがブロック状に混じる
1. 基盤層　7.5Y5/1 灰色粘質土
2. 基盤層　7.5Y6/1 灰色粘質土
3. 基盤層　5GY6/1 オリーブ灰色細砂、鉄分沈着
5. 基盤層　5Y6/1 灰色粘質土、鉄分沈着
6. 基盤層　7.5Y5/1 灰色細砂混じり粘質シルト
11. 基盤層　10Y6/1 灰色粘質土

図16　5－1区　調査区東壁断面土層図



C-2. 粘土採掘土坑　10YR6/1 灰色粘質シルトに2.5Y4/3 オリーブ褐色土がブロック状に混じる
A. 粘土採掘土坑　10YR5/6 黄褐色 5～30㎝大の礫層
C-7. 粘土採掘土坑　7.5Y7/1 灰白色粘質土、鉄分沈着
1. 基盤層　7.5Y5/1 灰色粘質土
3. 基盤層　5GY6/1 オリーブ灰色細砂、鉄分沈着
4. 基盤層　5GY7/1 明オリーブ灰色細砂～粗砂、鉄分沈着

図17　5-2区　調査区東壁断面土層図

(3) 出土遺物

遺物は、粘土採掘土坑の基底部から奈良時代の土師器甕１点、その他、堆積埋土から近現代の平瓦３点、桟瓦１点、合計５点が出土した。

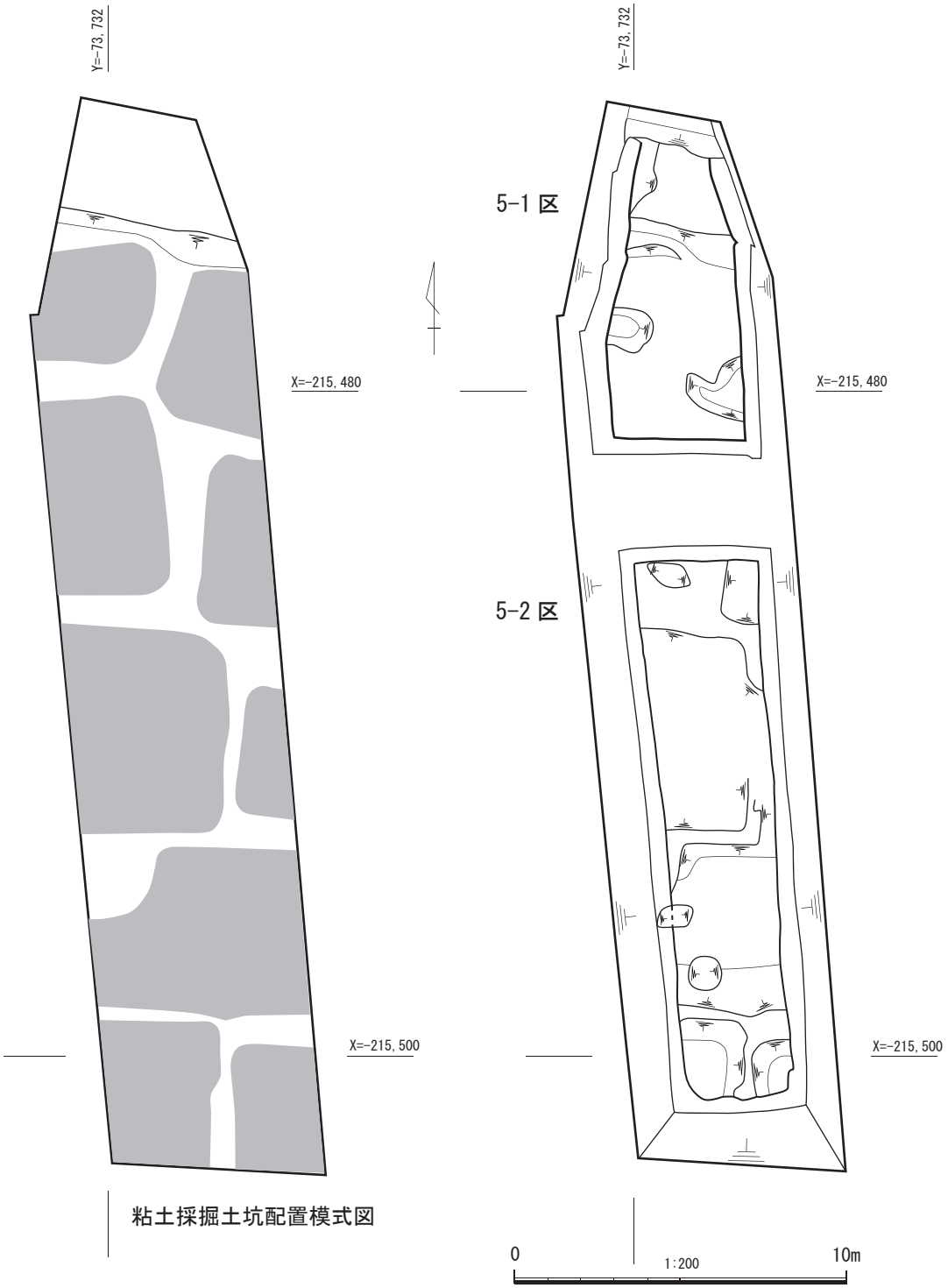


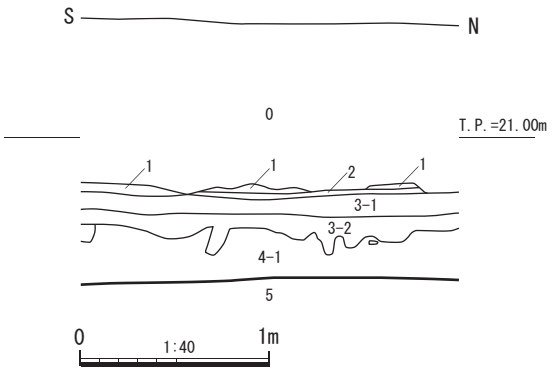
図 18　5 区　調査区全体図

7　6区（図19・20・39・40、写真図版6・15・16）

調査面積は198㎡である。

(1) 基本層序

6区の現況は、柑橘畑である。最上層は第0層（盛土）である柑橘の耕作土である。その下層は第1層（耕作土）・第2層（床土）の転作前の現代水田耕作土層である。この層も第0層を盛土する前に除去されたもようで、所々に薄く残存していただけである。その下層は第3層（N6.5/0灰白色シルト）、第4層（N7/0灰白色シルト）で中世遺物を含む層である。第5層は基盤層で（N7/0灰白色粘土に10YR6/6～6/8明黄褐色粘土が縦筋状に入る）ある。



0. 盛土
1. 水田耕作土　N5/0灰色シルト
2. 床土　2.5Y6/6明黄褐色シルト、砂質っぽい
3-1. N6.5/0灰白色シルトに2.5Y6/6明黄褐色シルトが縦筋状に入る、0.5～1㎝大のマンガン粒が1～2%入る
3-2. 3-1層に比して灰白色味が薄い、0.5～1㎝大のマンガン粒が1%未満入る
4-1. N7/0灰白色シルト～粘土、0.5～0.8㎝大のマンガン粒が1%未満入る
5. 基盤層　N7/0灰白色シルト～粘土に10YR6/6～6/8明黄褐色粘土が縦筋状に入る

図19　6区　調査区西壁断面土層図

(2) 検出遺構

調査区の北端で検出幅4m余りの微高地を検出した。微高地は調査区外の北側及び西側に延びる。検出した微高地の南から調査区の南端までが中世の水田耕作土層と考えられ、全域で踏み込み遺構（足跡）を検出した。踏み込み遺構の幅は0.08～0.12m、長さ0.20mまでのものが大半である。歩行の方向は幾つかあるが、主に南北方向に直線的に追えるものである。

(3) 出土遺物

第3･3'･4層の遺物包含層（中世水田耕作土層）等からは鎌倉時代の土師器皿17点･小皿9点（12）・土釜12点・火舎と考えられる1点・器種不明1点、瓦器椀190点（16・18）・小皿6点（22・26）、瓦質火舎と考えられる2点・甕1点・器種不明2点、東播系須恵器捏鉢2点（30）、瀬戸美濃系天目茶碗1点、備前焼壺1点、常滑焼甕1点（33）、龍泉窯系青磁碗1点、白磁1点、平瓦4点、籌木1点（39）、木片1点の遺物に混じって、弥生時代中期と考えられる鉢1点・サヌカイト剥片1点、弥生時代後期と考えられる高坏脚部1点・サヌカイト製有茎式石鏃1点（40）、奈良時代の土師器甕・鍋5点（2）・製塩土器1点・器種不明2点、須恵器坏2点・壺3点・甕3点・器種不明1点も出土した。合計275点の遺物が出土した。

8　7区（図22・21・39・40、写真図版7・15・16）

調査面積は115㎡である。

(1) 基本層序

7区の現況は、柑橘畑である。上層から第0層（盛土）、その下層には厚さ0.03～0.04mの第1・2層である現代耕作土と床土がまばらに残存する。第0層と置き換えられた時に除去されたと考えられる。さらにその下層は第3層（5Y7/1灰白色シルト～粘土に若干の微砂を含む）・第4層（N5.5/0灰色シルト～粘土）が堆積する。この2層から出土する遺物には奈良時代の須恵器があるが、瓦器が出土することから鎌倉時代に帰属するものと考えられる。第5層（N7/0灰色白粘土）･第6層（7.5GY8/1明緑灰色粘土）は無遺物層で自然流路の堆積層と考えられる。

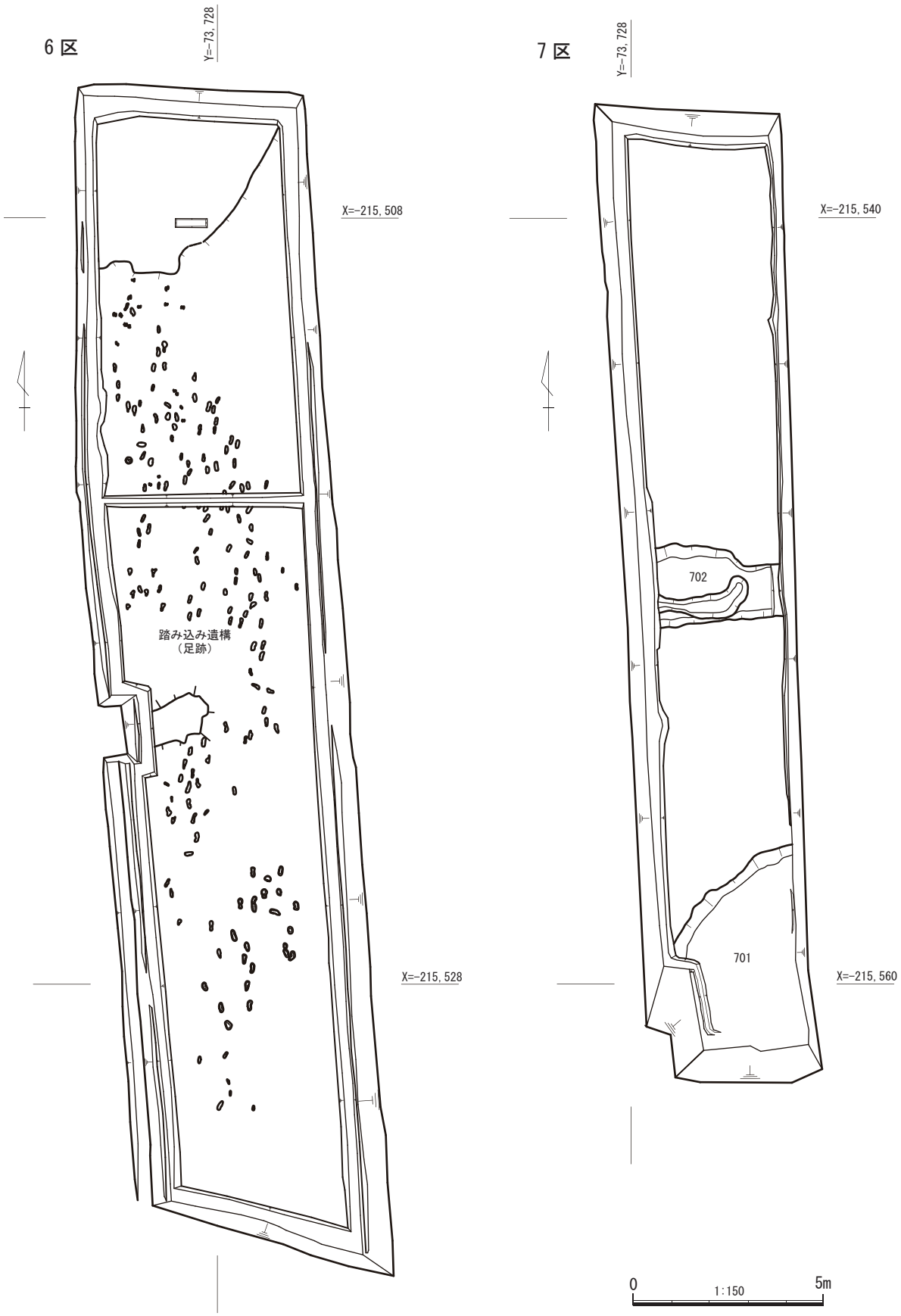


図 20　6・7 区　調査区全体図

(2) 検出遺構

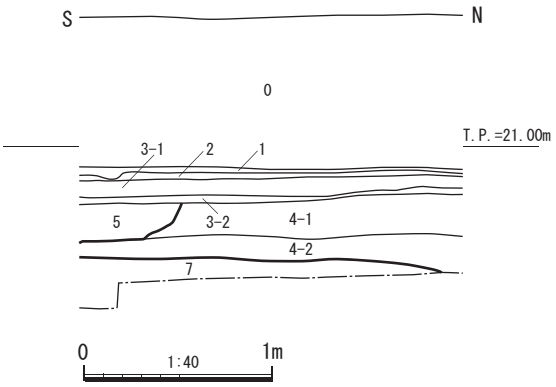
702 溝

702 溝は、調査区のほぼ中央に位置し、東側と西側は調査区外に延びるためその全容は不明である。平面規模は、幅 1.60 ～ 2.40 m、残存の深さは 0.50 mで、断面形が舟底形を呈する。堆積埋土は第 4 層とした灰色シルト～粘土層で、湿地状地形の一つと考えられる。

701 自然流路

701 自然流路は、調査区の南端に位置する。7 区の南側の 8 区では、北側で微高地からの落ちを検出している。従って、701 自然流路は流路の北側の肩で、8 区で検出している 801 自然流路は南側の肩と考えられる。

また、この調査区では踏み込み遺構（足跡）などの痕跡は確認できなかったことから、この辺り一帯が水田に利用されずに湿地であった可能性が高い。



0. 盛土
1. 水田耕作土
2. 床土　5Y7/2 灰白色シルト～粘土に 2.5Y7/6 明黄褐色シルト～粘土が混じる
3-1. 旧水田耕作土　5Y7/1 灰白色シルト～粘土に微砂を若干含む
3-2. 旧水田耕作土　10YR7/6 明黄褐色と 5Y7/1 灰白色シルト～粘土の混層、微砂を若干含む
4-1. N5.5/0 灰色粘土に 7.5YR5/8 明褐色粘質のマンガン粒 1 ～ 2% 含む、若干炭片も含む
4-2. N6.5/0 灰色微砂混じり粘土に 7.5YR5/8 明褐色粘質のマンガン粒を含む
5. 701 自然流路　10YR5/1 褐灰色粘土
7. 基盤層　10YR8/8 黄橙色粘土

図 21　7 区　調査区西壁断面土層図

(3) 出土遺物

第 4 層の遺物包含層（中世水田耕作土層）からは、鎌倉時代の土師器皿 3 点（11）・小皿 3 点・土釜 2 点、瓦器椀 58 点（15）・小皿 1 点（23）、備前焼甕 1 点、常滑焼甕 1 点、龍泉窯系青磁碗 1 点、炭化物 1 点の遺物に混じって、奈良時代の須恵器鉢 1 点、江戸時代の肥前系染付丸碗 1 点も出土した。合計 73 点の遺物が出土した。

9　8 区（図 22・23・24・39・40、写真図版 7・8・15）

調査面積は 113 ㎡である。

(1) 基本層序

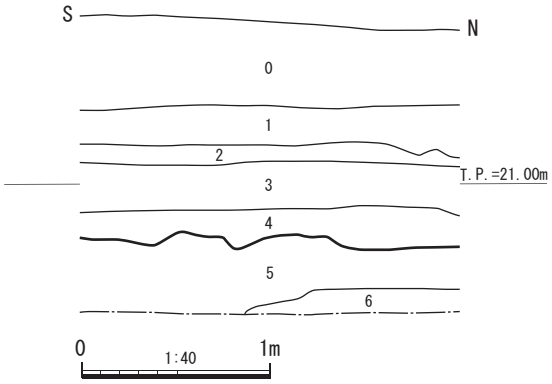
8 区の現況は、柑橘畑の放棄された荒地と、一部、コンクリート舗装の南北方向の里道である。

(2) 検出遺構と出土遺物

遺構検出面の標高は 20.70 m前後を測り、調査区の大半が奈良時代～中世の遺物が出土する 801 自然流路である。801 自然流路の下位で奈良時代の 802 溝を検出した。

802 溝（図 24、写真図版 8）

802 溝は、調査区の南側に位置する。調査区内では、L 字状に折れ曲がり、検出延長南北・東西各 4.0 m 以上、幅 0.70 ～ 1.54 m、残存の深さは 0.46 ～ 0.72 mを測る。断面形は U 字形を呈する。埋土は砂



0. 盛土
1. 水田耕作土　2.5Y4/2 暗灰黄色土
2. 床土　5Y6/2 灰オリーブ色砂質シルト
3. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト、マンガン粒を含む
4. 10YR5/1 褐灰色粘質シルト
5. 基盤層　5GY7/1 明オリーブ灰色微砂混じり粘質シルト、鉄分沈着
6. 基盤層　10G5/1 緑灰色粘質シルト

図 22　8－2 区　調査区西壁断面土層図

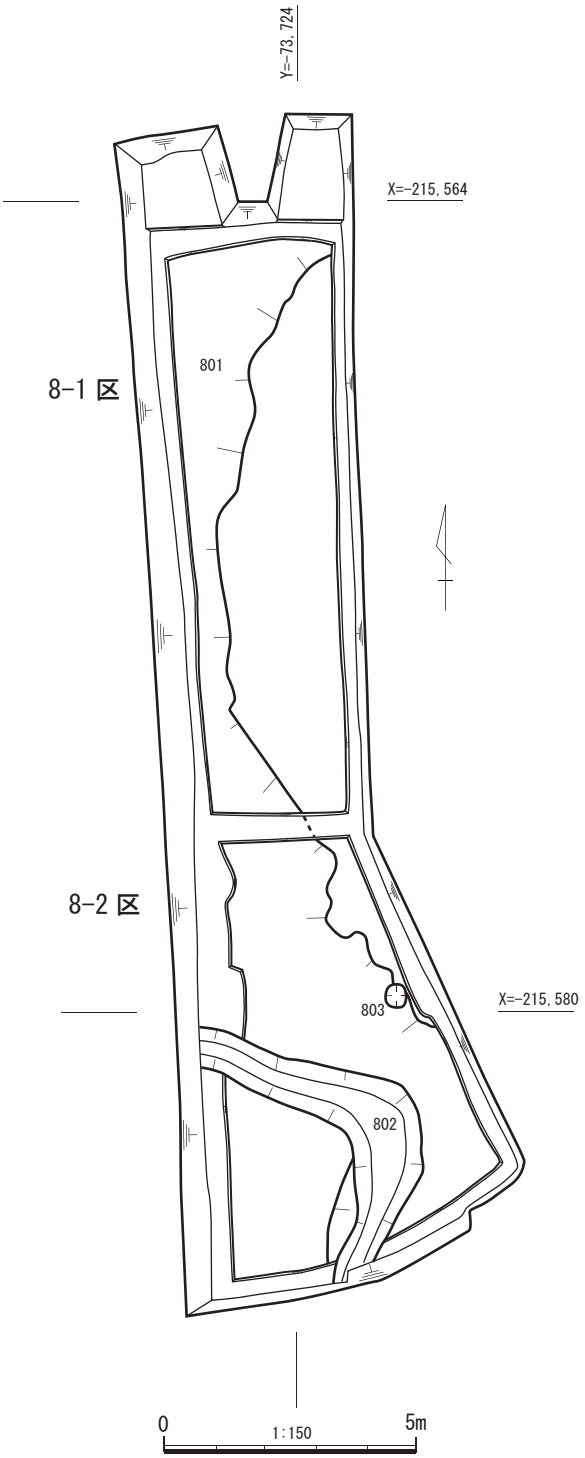
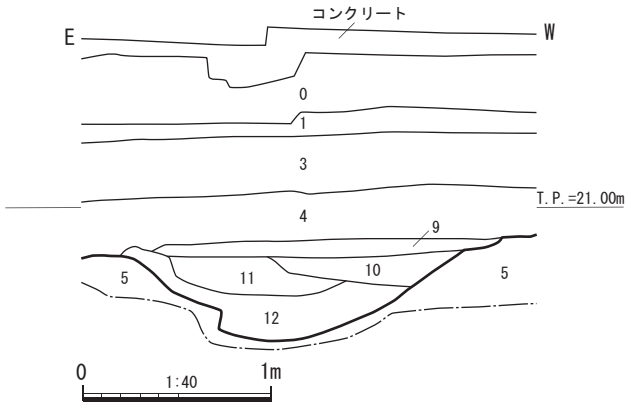


図 23　8 区　調査区全体図



0. 盛土
1. 水田耕作土　2.5Y4/2 暗灰黄色土
3. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト、マンガン粒を含む
4. 801 自然流路　10YR5/1 褐灰色粘質シルト
5. 基盤層　5GY7/1 明オリーブ灰色微砂混じり粘質シルト、鉄分沈着
9. 802 溝　2.5Y4/2 暗灰黄色細砂～粗砂
10. 802 溝　11 層に 5 層がブロック状に混じる
11. 802 溝　2.5Y5/1 黄灰色細砂～粗砂と 2.5Y6/2 灰黄色粘質シルトが互層に堆積する
12. 802 溝　7.5Y7/1 灰白色細砂混じり粘質シルトに 2.5GY6/1 オリーブ灰色粘質シルトが筋状に混じる

図 24　8－2 区　調査区南壁と 802 溝断面土層図

層と粘質シルトが互層に堆積する。

遺物は、弥生時代の台石と考えられる砂岩製の石材 1 点、奈良時代の土師器甕 1 点、須恵器甕 2 点、凸面格子叩きの平瓦 1 点（10）、合計 5 点が出土した。

803 土坑

803 土坑は、調査区南側の 801 自然流路の北東側に位置する。平面規模は、短軸（南北）0. 46 m、長軸（東西）0. 52 m、残存の深さは 0. 42 mを測る。

遺物は、下層から奈良時代の土師器甕 1 点が出土したのみである。

801 自然流路

801 自然流路は、調査区の中央東側を除く全域で検出した。調査区の東側は現状の地形でも小高くなっており、西に向かって緩やかに下がっていき、調査区西側で残存の深さは 0. 40 mを測る。周辺地形や堆積埋土の状況から見ても南から北に向かって延びると考えられる。堆積埋土は粘質シルトである。801 自然流路に沿うように直径約 5 ㎝の杭が約 80 ㎝間隔で並んでおり、土留めに伴うものと考えられる。

遺物は、弥生時代と考えられるサヌカイト剥片 1 点、奈良時代の土師器羽釜鍋 2 点（3）、須恵器皿 2 点・蓋 1 点・壺 2 点・甕 19 点、鎌倉時代の土師器皿 6 点・小皿 11 点（2 個体分）（13）・土釜 4 点、瓦器

椀 53 点・小皿 1 点（24）、東播系須恵器捏鉢 2 点、合計 102 点が出土した。

（3）その他の出土遺物

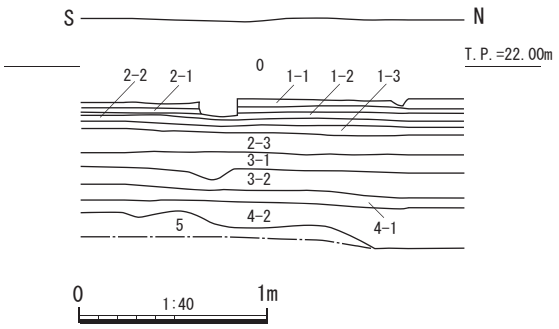
その他、調査区側溝等の出土層位からの遺物は、鎌倉時代の土師器皿 5 点・土釜 3 点、瓦器椀 19 点（14・17）・小皿 1 点、瓦質甕 1 点、白磁壺 1 点、平瓦 1 点・丸瓦 1 点、器種不明金属 2 点の遺物に混じって、奈良時代の土師器甕 1 点、須恵器坏 1 点・蓋 2 点（4）・壺 3 点（6）・甕 3 点（9）、江戸時代の不明土師器 1 点、陶器 3 点、磁器 2 点、平瓦 3 点・丸瓦 1 点、壁土 1 点も出土した。合計 55 点の遺物が出土した。これらの多くは 801 自然流路に起因する遺物と考えられる。

10　9 区（図 25・26・27・39・40、写真図版 9・15・16）

調査面積は 415 ㎡である。

（1）基本層序

9 区の現況は、柑橘畑である。最上層は厚み 0.4 ～ 0.5m の第 0 層（盛土）で、その下層は現代水田耕作土層の第 1 層（耕作土）・第 2 層（床土）が僅かに残存している。第 3 層（5Y7/1 灰白色微砂混じりシルト）は水平堆積を呈するところから中世水田耕作土層と考えられる。その下層の第 4 層は 2 層に分層され、第 4-1 層（10YR6/1 褐灰色シルト～粘土）・第 4-2 層（N5.5/0 灰色粘土）で、湿地状地形の堆積埋土と考えられる。なお、第 4-2 層からは 13 世紀に帰属する瓦器椀の破片が微量であるが出土しているため、901 湿地状地形が形成され始めたのは鎌倉時代初頭と考えられる。



1-1. 水田耕作土
1-2. 旧水田耕作土
1-3. 旧水田耕作土
2-1. 床土　10YR7/8 黄橙色シルト
2-2. 旧床土　2.5Y6/2 灰黄色と 10YR7/8 黄橙色微砂混じりシルトの混層
2-3. 旧床土　2.5Y7/1 灰白色微砂混じりシルト、0.3 ～ 0.8 ㎝大のマンガン粒が 1% 入る
3-1. 5Y7/1 灰白色シルトに 10YR7/8 黄橙色シルトが縦筋状に入る、0.3 ～ 0.8 ㎝大のマンガン粒が 1% 入る
3-2. 3-1 層に酷似するが、3-1 層より 10YR7/8 黄橙色が多い
4-1. 901 湿地状地形　10YR6/1 褐灰色シルトに 10Y7/8 黄橙色シルトが縦筋状に入る
4-2. 901 湿地状地形　N5.5/0 灰色粘土に 10YR7/8 黄橙色シルトが縦筋状に入る、全体に 0.2 ～ 1.5 ㎝大の炭片が 1% 未満入る
5. 901 湿地状地形　10BG7/1 明青灰色シルト混じりの微砂層

図 25　9 区　調査区西壁断面土層図

（2）検出遺構と出土遺物

調査区の東端の 2 箇所で微高地の端を僅かに検出した。微高地上では土坑を 3 基、溝を 1 条検出した。

902 土坑

902 土坑は、調査区の南東側に位置し、南北に長い不整形を呈する。903 溝と重複して、これより新しい。平面規模は、短軸（東西）1.55 m、長軸（南北）3.00 m、残存の深さは 0.25 mを測る。堆積埋土は、単一層の 5Y6/2 灰オリーブ色微砂混じりシルトである。

遺物は、江戸時代の肥前系唐津天目茶碗 1 点が出土したのみである。

904 土坑

904 土坑は、調査区の南端に位置し、歪な隅丸方形を呈する。903 溝と重複して、これより新しい。平面規模は、東西、南北共に 1.05 m、残存の深さは 0.18 mを測る。

遺物は、奈良時代の須恵器蓋 1 点（00）、鎌倉時代の瓦器椀 1 点、江戸時代の肥前系唐津碗 1 点が出土したのみである。

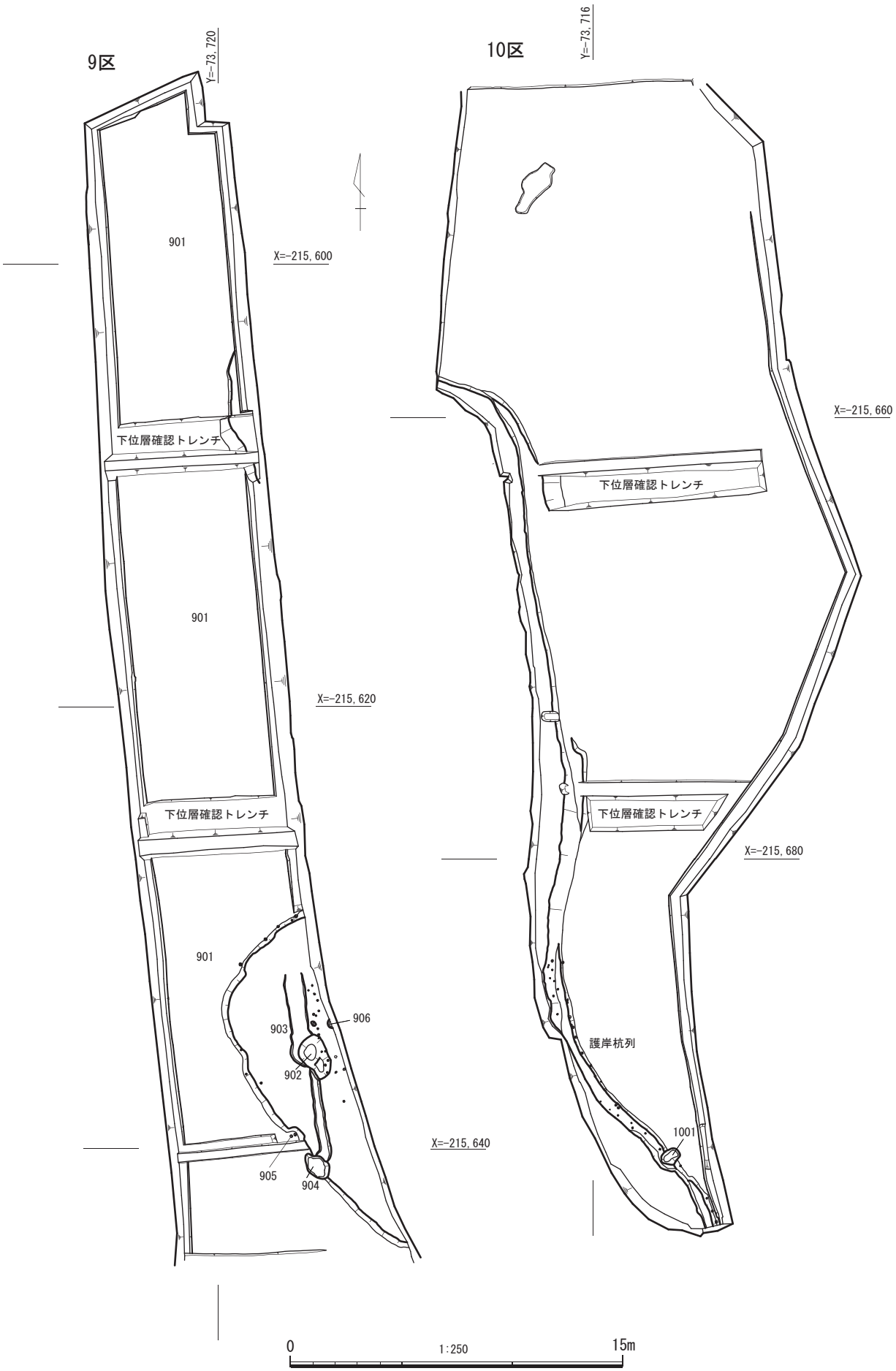


図 26　9・10 区　調査区全体図

903 溝

903溝は、調査区の南東側に位置し、北側と南側は湿地状地形と重複するため全容は不明である。また、902・904 土坑と重複して、土坑が新しい。溝の幅は 0. 50 ～ 0. 90 m、検出延長は 9. 0 mである。残存の深さは約 0. 10 mを測る。

遺物は、鎌倉時代の瓦器椀 2 点が出土したのみである。

901 湿地状地形

901 湿地状地形は、9 区全域に広がる。残存の深さは、0. 25 m前後を測る。

遺物は、901 湿地状地形及び第 4 層として取り上げた鎌倉時代の土師器皿 4 点・小皿 6 点・土釜 3 点・器種不明 1 点、瓦器椀 67 点・小皿 3 点（20・21）、瓦質甕 1 点、東播系須恵器捏鉢 1 点、備前焼擂鉢 1 点（32）、龍泉窯系青磁碗 1 点（34）、白磁碗 1点（38）、平瓦 5 点・丸瓦 1 点、鉄滓 1 点、桃種 1 点の遺物に混じって、旧石器時代と考えられる硬質頁岩製の剥片 1 点、奈良時代の土師器椀 1 点（1）、須恵器坏 7 点、壺 2 点・甕 10 点、平瓦 1 点も出土した。合計 121 点の遺物が出土した。

なお、微高地から湿地状地形への落ち際には細い杭が打設されていた。この状況は、杭列に横板などを渡し、護岸施設と同時に微高地と湿地との境界を成していたものと推測される。

微高地を検出した地点の東側の調査区外は、現在は民家が建ち並んでいることから、微高地が東側に広がっていることが推測でき、古来より生活域となっていた公算が高いと考えられる。

(3) その他の出土遺物

その他、第 3 層（中世水田耕作土層）からの遺物は、鎌倉時代の土師器小皿 2 点、瓦器椀 2 点、常滑焼甕 1 点の遺物に混じって、奈良時代の須恵器坏 2 点・甕 2 点、江戸時代の肥前系陶器唐津碗 1 点も出土した。合計 10 点の遺物が出土した。

また、905 小穴から旧石器時代と考えられる硬質頁岩製の剥片 1 点が出土した。

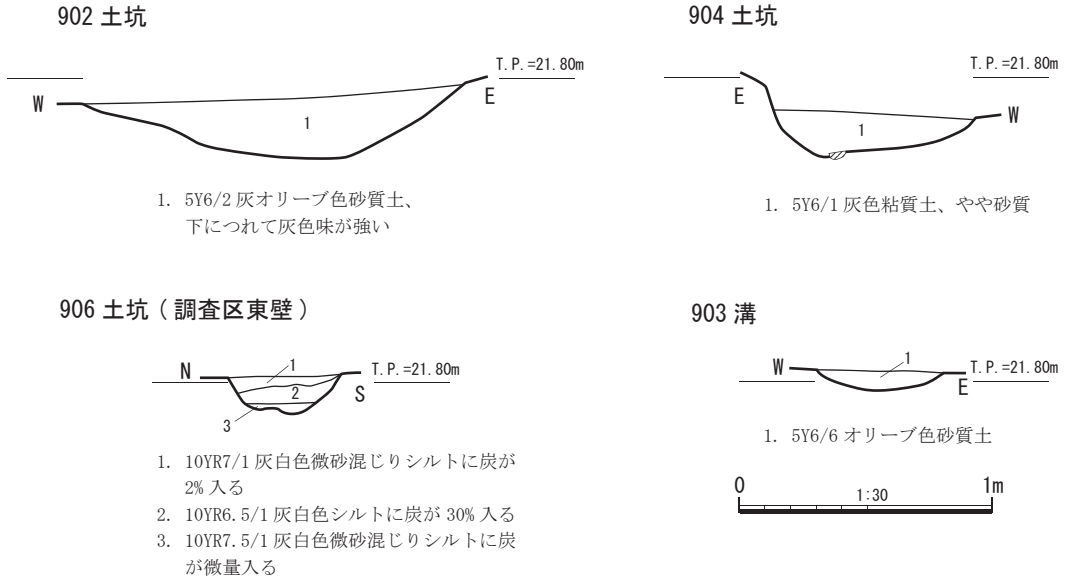


図 27　9 区　902・904・906 土坑、903 溝断面土層図

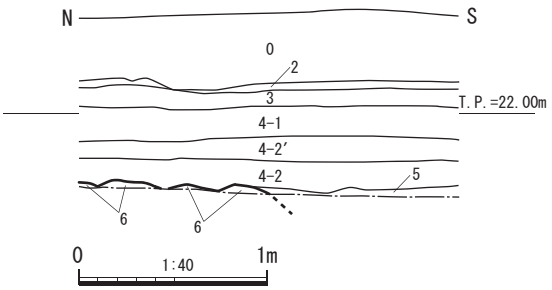
11　10 区（図 26・28、写真図版 10・15）

調査面積は 559 ㎡である。

（1）基本層序

10 区は調査の便宜上、9 区と水路で画されている箇所で調査区を区切っただけで、基本的には 9 区と同様の堆積層序を示す。

10 区の現況は、柑橘畑である。最上層は柑橘畑耕土の第 0 層（盛土）である。その下層は柑橘畑に転作前の現代水田耕作土層である第 1 層（耕作土）・第 2 層（床土）、その下層は中世水田耕作土層と思われる第 3 層（5Y7/1 灰白色シルト）、第 4 層は 9 区で検出した湿地状地形の堆積土である。この層は 9 区と同様に 2 層に分層できる。第 4 層の下層は第 5 層（10BG7/1 明青灰色シルト混じりの微砂層）となる。なお、第 5 層は概ね調査区の西側に堆積し、調査区の東側では第 4 層の下層は基盤層（10Y8/1 灰白色砂混じりシルト）となる。第 5 層からの出土遺物は皆無であった。



0. 盛土
2. 床土
3. 5Y7/1 灰白色シルトに 10YR7/8 黄橙色シルトが縦筋状に入る
4-1. 10YR6/1 褐灰色シルトに 10Y7/8 黄橙色シルトが縦筋状に入る、鉄分多量
4-2′. 4-2 層に酷似するが、4-2 層と分離が可能
4-2. N5.5/0 灰色粘土
5. 10BG7/1 明青灰色シルト混じりの微砂層
6. 基盤層

図 28　10 区　調査区東壁断面土層図

（2）検出遺構

調査区の南側の西端で南北方向の杭列を検出した。杭列は西側の微高地（11 区）からの落ち際に沿って打設されていた。杭は先をカットし尖らせた直径 5 ～ 8 ㎝のものを 0. 40 ～ 0. 60 mの間隔で打設されていた。これらの杭は、9 区で検出した杭列と同様のものである。9 区では東側の微高地からの落ち際に、10 区では西側の微高地からの落ち際に打設され、境界明示としている。

1001 土坑

1001 土坑は、調査区の南端の微高地の落ち際に位置し、東西に長い歪な楕円形を呈する。平面規模は、短軸（南北）0. 60 m、長軸（東西）0. 90 m、残存の深さは西肩から 0. 30 mを測る。

遺物は出土していない。

（3）出土遺物

第 4 層（湿地状地形堆積土）からの遺物は、鎌倉時代の土師器皿 7 点・土釜 3 点・器種不明 1 点、瓦器椀 43 点・小皿 1 点、瓦質甕 3 点、備前焼甕 1 点、平瓦 1 点、桃種 1 点、結晶片岩 1 点、チャート礫 1 点の遺物に混じって、奈良時代の須恵器坏 1 点・蓋 1 点（5）・壺 1 点・甕 3 点、江戸時代の肥前系陶器唐津碗 1 点、銅銭 1 点も出土した。合計 71 点の遺物が出土した。

12　11 区（図 29・30・31・40、写真図版 11・12・16）

調査面積は 372 ㎡である。

（1）検出遺構

遺構検出面の標高は 22. 50 m前後を測り、調査区の大半は時期が不明であるが土取りなどにより削平を受けている。

1101 土坑

1101 土坑は、調査区の中央東側の 1102 落ち込み肩部に位置する。1102 自然流路と重複し、1102

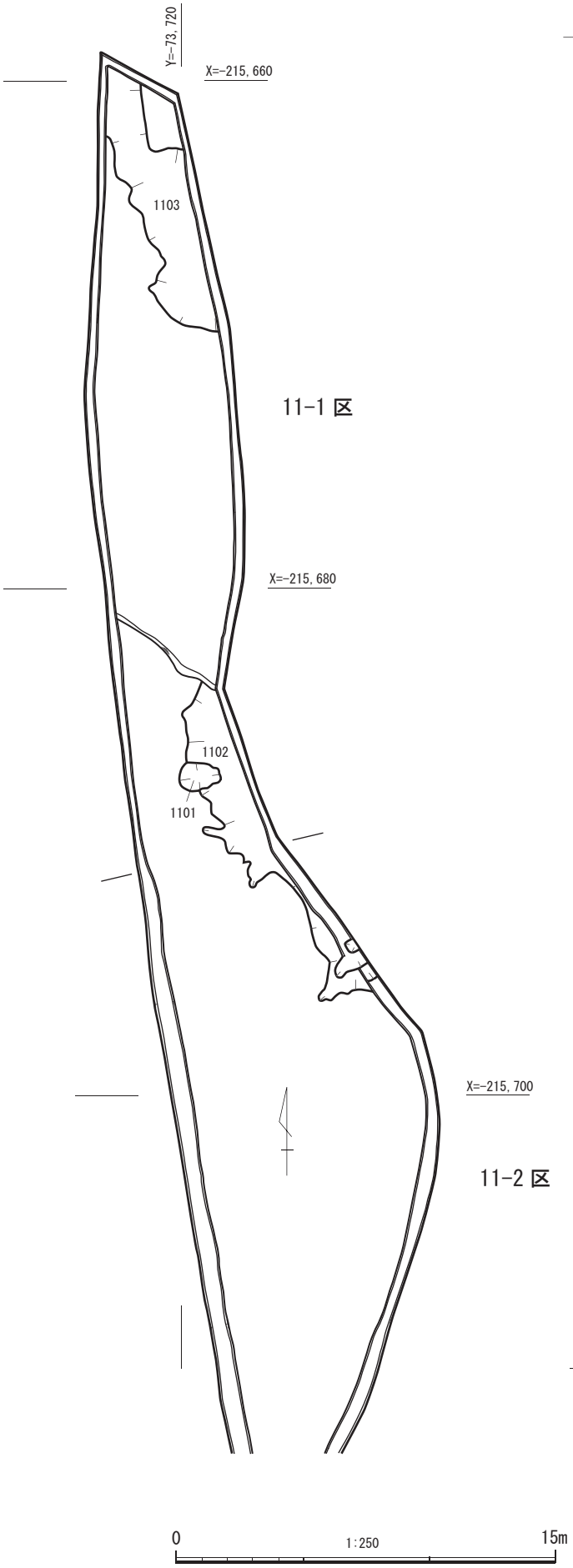
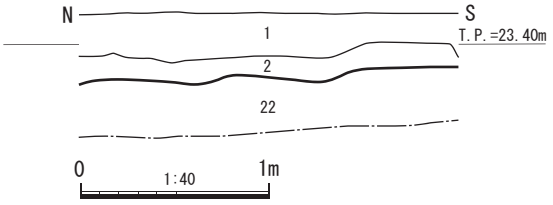
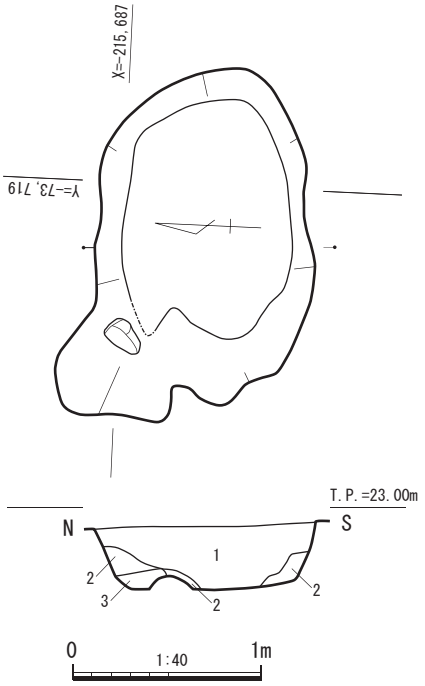


図 30　11 区　調査区全体図



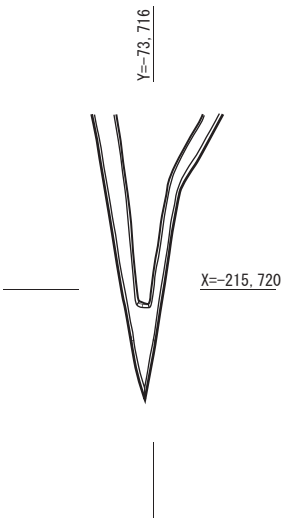
1. 水田耕作土　2.5Y4/4 オリーブ褐色土
2. 床土　5Y7/1 灰白色シルト
22. 基盤層　5Y6/3 オリーブ黄色粗砂混じり粘質土、鉄分沈着

図 29　11-2 区　調査区東壁断面土層図



1. 2.5Y6/1 灰色砂質土、鉄分沈着
2. 5Y6/1 灰色シルト、鉄分沈着
調査区東壁断面土層 9 層と 1101 土坑の 1 層がブロック状に混じる
3. 2.5Y6/3 にぶい黄色粘質シルト、鉄分沈着

図 31　11-1 区　1101 土坑実測図



落ち込みより新しい。平面規模は、短軸（南北）1.14 m、長軸（東西）1.90 m、残存の深さは0.34 mを測る。

遺物は、奈良時代の須恵器坏3点、鎌倉時代の土師器皿1点、瓦器椀10点、平瓦1点に混じって、弥生時代後期と考えられる敲打痕のある砂岩製の台石1点が出土した。

1102落ち込み

1102落ち込みは、調査区の中央東側に位置する。東側は10区に延びる。北側は土取りなどにより削平されるため、全容は不明である。北北西―南南東方向の検出延長が約14 m、幅2.10 m以上、残存の深さは0.65 mを測る。

遺物は、鎌倉時代の土師器皿1点・小皿1点、瓦器椀1点・小皿2点が出土した。

1103自然流路

1103自然流路は、調査区の北端に位置する。北側と東側は10区に延びる。北北西―南南東方向の検出延長が約10 m、幅3.0 m以上、残存の深さは0.17～0.23 mを測る。

遺物は、鎌倉時代の土師器皿1点、瓦器椀1点が出土したのみである。

(3) 出土遺物

その他、遺物は、調査区側溝、基盤層直上として取り上げた鎌倉時代の土師器皿4点、瓦器椀1点・小皿1点・土釜1点、龍泉窯系青磁碗2点（35）、平瓦1点に混じって、弥生時代と考えられるサヌカイト製剥片1点、奈良時代の須恵器甕1点、江戸時代の肥前系染付碗3点、桟瓦1点が出土した。

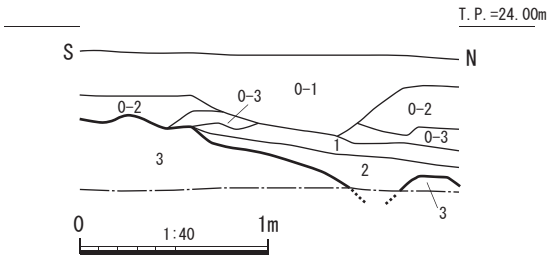
11区全体の遺物は、合計39点である。

13　12区（図32・33・34・39・40、写真図版12・15・16）

調査面積は428 ㎡である。

(1) 基本層序

12区の現状は、柑橘畑である。12区の第0層の厚みは0.2～0.4 mと他の地区に比して浅い。第0層の下層には転作前の水田耕作土層（第1層：耕作土、第2層：床土）が残存する箇所もあるが、除去されてほとんど残っていない。第3層（5Y7/1灰白色シルト）は黒褐色のマンガン粒を含み、5～10 ㎝程度の厚みで水平堆積を示す。この層からは瓦器、土師器、須恵器などが微量ながらも出土した。近世遺物が出土しないため中世水田耕作土層と考えられる。その下層は第4層となり、9区・10区で確認した層と同様で2層に分層できる。湿地状地形である。湿地状地形の範囲は、調査区の北側と南側で確認した。中央部は微高地となる。



0-1. 盛土
0-2. 嵩上げ土　2.5Y5/2暗灰黄色土と10YR7/8黄橙色微砂混じりシルトの混層
0-3. 嵩上げ土　10YR7/6明黄褐色シルトと10YR5/2灰黄褐色シルトの混層、0.2～0.5cm大のマンガン粒を1%含む
1. 1201自然流路　10YR5/1褐灰色シルト0.5～1cm大のマンガン粒を1%含む
2. 1201自然流路　10YR5/2灰黄褐色シルト0.5～1cm大のマンガン粒を1%含む
3. 基盤層　10YR7/8黄橙色粘土と10YR8/1灰白色微砂混じりシルト～粘土の混層、0.5～1cm大のマンガン粒が2%入る

図32　12区　調査区西壁断面土層図

(2) 検出遺構

1201自然流路（図34、写真図版12）

1201自然流路は、調査区の南側で南西から北東方向に延びて位置する。自然流路は湿地状地形の堆

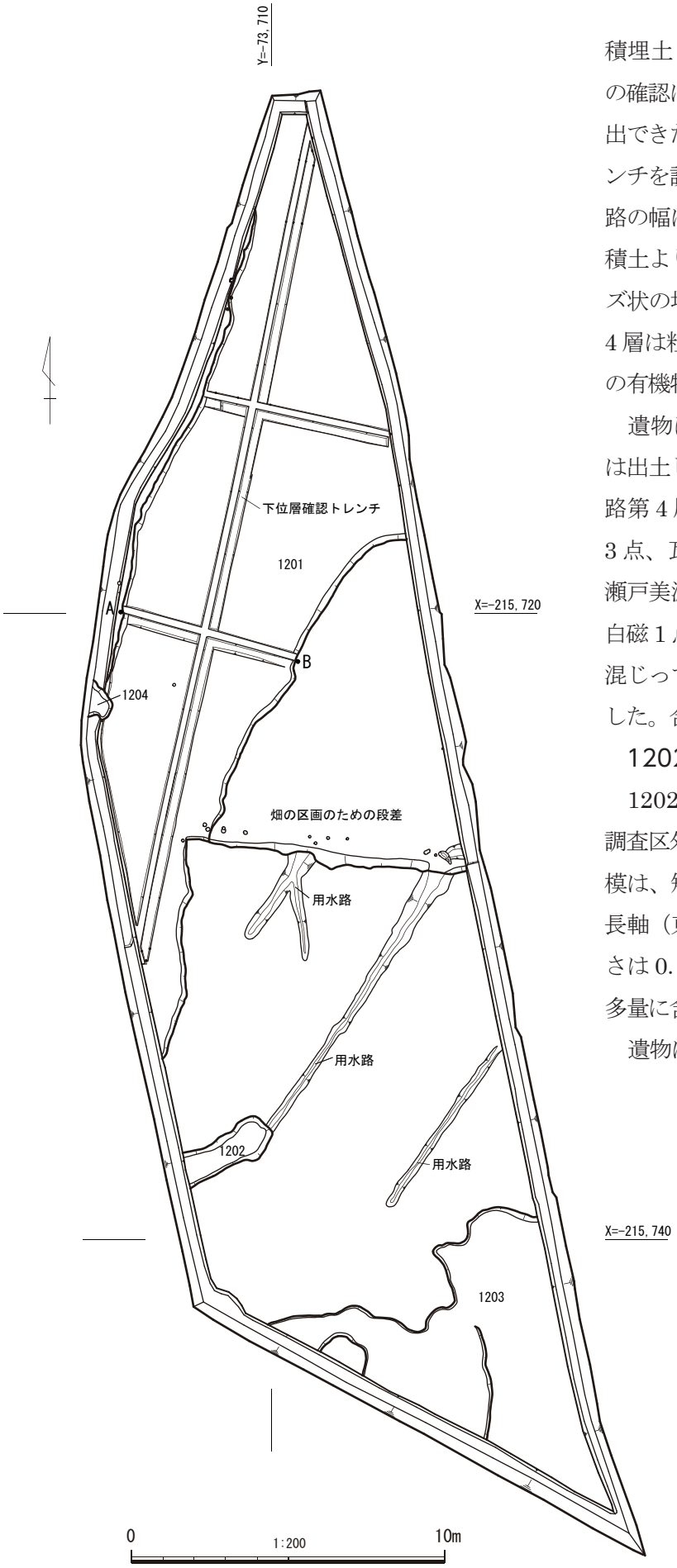


図 33　12 区　調査区全体図

積埋土（第 4 層）の下層で検出した。自然流路の確認は、調査区内の両側で微高地の高まりが検出できた箇所で、自然流路に直行する方向でトレンチを設定して行った。検出した箇所では自然流路の幅は 5. 70 m、残存の深さは湿地状地形の堆積土より下位で 1. 76 mを測る。堆積埋土はレンズ状の堆積を示し、5 層に分層できる。上位層の 4 層は粗砂を含むシルト層で、最下層は木の枝等の有機物を含む粗砂層である。

遺物は、自然流路を掘削したトレンチ箇所では出土しなかったが、他の範囲から 1201 自然流路第 4 層として取り上げた鎌倉時代の土師器椀 3 点、瓦器椀 12 点、備前焼擂鉢 1 点・甕 1 点、瀬戸美濃系天目茶碗 1 点、龍泉窯系青磁碗 1 点、白磁 1 点、中国製染付碗 1 点（37）、鉄釘 1 点に混じって、奈良時代の須恵器甕 2 点（8）が出土した。合計 24 点の遺物が出土した。

1202 土坑

1202 土坑は、微高地の西端に位置し、西側は調査区外に延びるため全容は不明である。平面規模は、短軸（北北西―南南東）0. 80 ～ 1. 20 m、長軸（東北東―西南西）3. 10 m以上、残存の深さは 0. 15 ～ 0. 22 mを測る。堆積埋土は、礫を多量に含む 10YR7/6 明黄褐色シルトである。

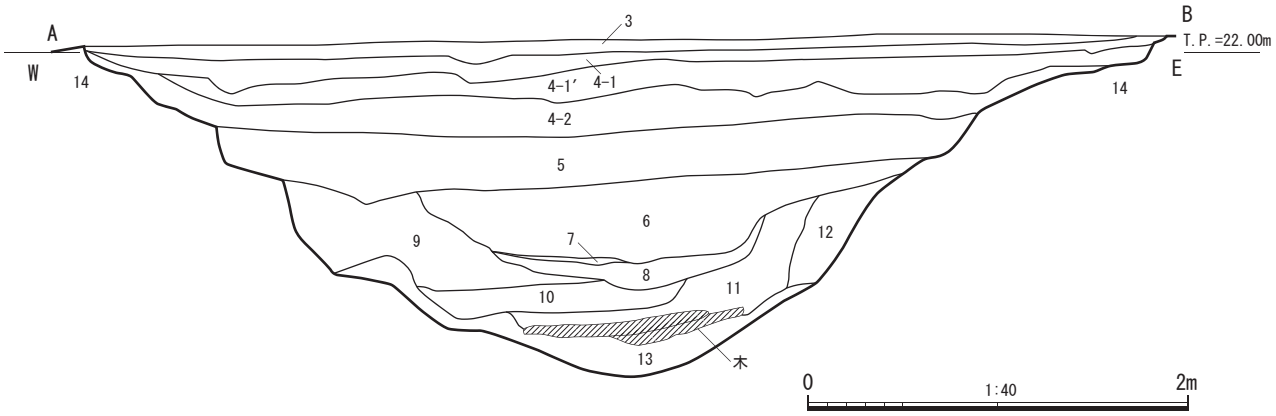
遺物は、出土していない。

1203 落ち込み（湿地状地形）

1203 落ち込み（湿地状地形）は、調査区の南端に位置し、東側と南西側は調査区外に延びるため全容は不明である。堆積埋土は微砂及び細砂を含む 5B6/1 青灰色シルト～粘土である。おそらく、この下位層は自然流路状になっていると考えられる。

遺物は、出土していない。

その他、調査区東壁の南端から約 30 m北の地点で、幅 3 ～ 8 ㎝の 3 条の噴砂と思われる砂脈を検出した。この地点の噴砂上面の堆積土は盛土



3. 5Y7/1 灰白色シルトに 10YR7/8 黄橙色シルトが縦筋状に入る、0.3 ～ 0.8cm 大のマンガン粒が 1% 入る
4-1. 10YR6/1 褐灰色シルトに 10YR7/8 黄橙色シルトが縦筋状に入る
4-1′. 4-1 層に酷似するが、4-1 層と分離が可能
4-2. N5.5/0 灰色粘土に 10YR7/8 黄橙色シルトが縦筋状に入る
5. 5GY6/1 緑灰色粘土、0.2 ～ 1 cm大の礫をまばらに含む
6. N4/0 灰色粘土、0.1 ～ 0.3 cm大の炭化物（炭か）を 7% 含む
7. 粗砂層
8. 10YR4/1 褐灰色シルトに粗砂を含む
9. 5B6.5/1 明青灰色粘土、0.1 ～ 0.3 cm大の炭化物（炭か）を 2% 含む
10. N3/0 暗灰色細砂～粗砂層、暗灰色は自然炭化物による変色
11. 粗砂層
12. 5Y6/4 オリーブ黄色粘土に 5BG7/1 明青灰色微砂混じりシルトが斑点状に混じる
13. 粗砂～ 3.0 cm大の礫層
14. 基盤層　10YR7/8 黄橙色粘土と 10YR8/1 灰白色微砂混じりシルト～粘土の混層、0.5 ～ 1cm 大のマンガン粒が 2% 入る

図 34　12 区　1201 自然流路断面土層図

であるため時期は特定できていない。

また、現代の水田に伴う暗渠排水溝を 5 条検出した。

(3) 出土遺物

その他、遺物は 1204 土坑から鎌倉時代の瓦器椀 1 点、調査区西壁側溝として取り上げた江戸時代の器種不明土師器 1 点、肥前系唐津鉢 1 点、青磁碗 1 点、染付 1 点がある。

12 区全体の遺物は、合計 29 点である。

14　13 - 1 区（図 35・36・37、写真図版 13）

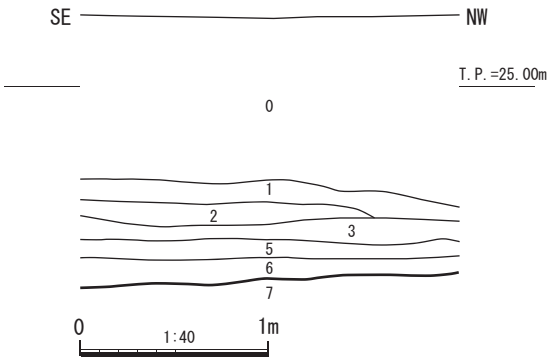
調査面積は、118.6 ㎡である。

(1) 基本層位

調査対象地は、現在供用している湯浅御坊道路が建設される以前は、水田から転作された果樹園で、道路建設以降は造成されて宅地となっていた。この時の盛土を 0 層として、それ以下の基本層を 3 層に分けている。第 1 層は近世以降の耕作土、第 2 層は中世の水田耕作土である。第 3 層は基盤層で、北側では 2.5Y6/6 明黄褐色細砂混シルト、南側では 2.5Y6/2 黄灰色シルトとなる。

(2) 検出遺構

調査区の北側にコンクリート擁壁建設時の撹乱、北東部には下水道による撹乱、中央には浄化槽や近代以降の井戸による撹乱、南西部から北東部に



0. 盛土
1. 近世以降の耕作土　2.5Y5/2 暗灰黄色細砂混シルト
2. 近世以降の耕作土　2.5Y5/3 黄褐色細砂混シルト 2.5Y6/4 にぶい黄色粗砂がブロック状に入る
3. 近世以降の耕作土　2.5Y5/4 黄褐色細砂混シルト
5. 中世の水田耕作土　5Y5/3 灰オリーブ色シルト
6. 1305 落ち込み　5Y6/1 灰色粘性シルト
7. 基盤層　2.5Y6/2 黄灰色シルト

図 35　13-1 区　調査区南壁断面土層図

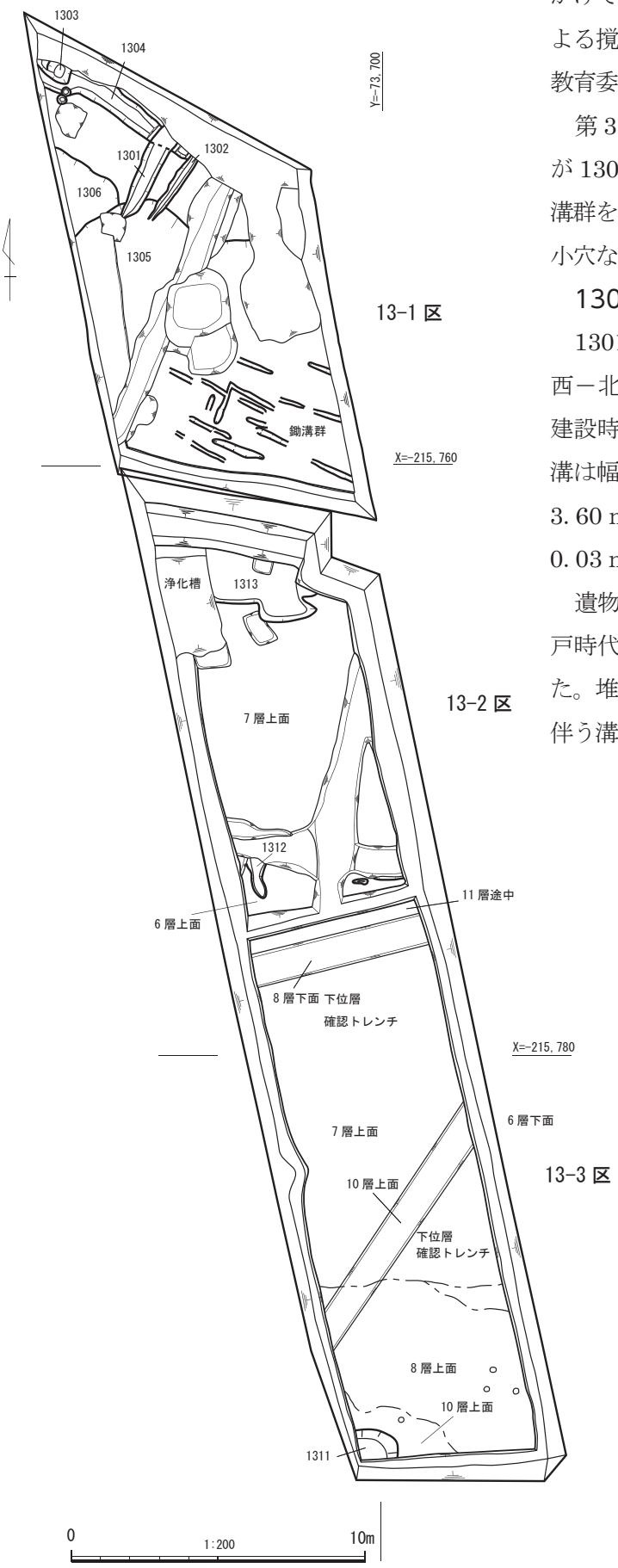


図 36　13 区　調査区全体図

かけては用水路による撹乱がある。なお、下水道による撹乱部については、平成 29 年 4 月に有田川町教育委員会が立会調査を実施している。

第 3 層上面にあたる旧地形は北側が高く、南側が 1305 落ち込みとなる。南側の第 1 層直下で、鋤溝群を検出したのをはじめ、第 3 層上面で溝・土坑・小穴などを検出した。

1301・1302 溝

1301・1302 溝は、調査区の北側に位置する。南西－北東方向に延び、北東側がコンクリート擁壁建設時に削平されるため全容は不明である。1301 溝は幅 0. 75 m、残存の深さは 0. 07 m、検出延長 3. 60 mである。1302 溝は幅 0. 4 m、残存の深さ 0. 03 m、検出延長 2. 60 mである。

遺物は、1301 溝から鎌倉時代の瓦器椀 4 点、江戸時代の肥前系唐津と考えられる蓋 1 点が出土した。堆積埋土からも近世に帰属する遺構で、耕作に伴う溝である可能性がある。

1303 土坑

1303 土坑は、調査区北西隅に位置する。1304 溝の基底部で検出した。北東側がコンクリート擁壁建設時に削平されて全容は不明である。平面形はやや歪な楕円形を呈すると考えられ、短軸（南西―北東）0. 62 m以上、長軸（北西―南東）1. 30 m、残存の深さは 0. 36 mを測る。

遺物は、鎌倉時代の瓦器椀 3 点が出土しており、堆積埋土からも中世の遺構と考えられる。

1304 溝

1304 溝は、調査区北西隅で検出した。北西側が調査区域外となり、南東側がコンクリート擁壁建設時に削平されるため全容は不明である。幅 0. 80 m、残存の深さは 0. 20 m、検出延長 6. 00 mを確認した。

遺物は、鎌倉時代の瓦器椀 6 点が出土しており、堆積埋土からも中世の遺構と考えられる。

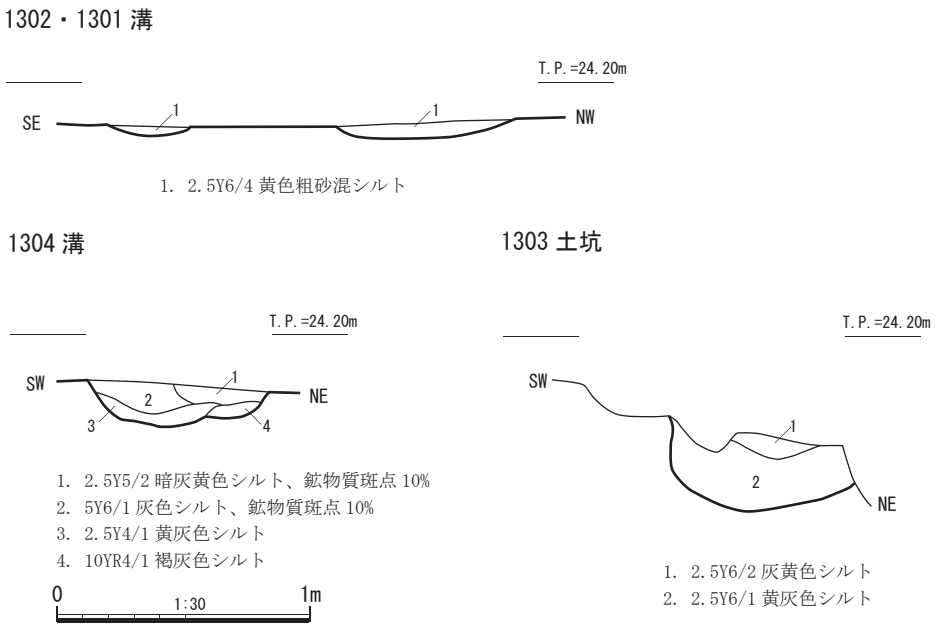


図 37　13-1 区　1301・1302・1304 溝、1303 土坑断面土層図

1305 落ち込み

1305 落ち込みは、調査区南側に広がる低地遺構で、調査区域外に延びるため全容は不明である。全掘を行っていないが、サブトレンチで確認したところ残存の深さは 0.25 m前後で、基底部には凹凸が見られる。

遺物は、鎌倉時代の土師器皿 3 点・小皿 1 点・器種不明 1 点、瓦器椀 18 点・小皿 2 点、江戸時代と考えられる陶器壺 1 点が出土した。

写真 10　1991 年度調査M地区と 13 区
（東側上空から）

(3) 出土遺物

その他の遺物には、調査区の北西側に位置し、1305 落ち込みと重複する 1306 土坑から鎌倉時代の瓦器椀 9 点、不明土器 2 点、鉄滓 1 点が出土した。また、近世以降の耕作土から江戸時代の瀬戸美濃系天目茶碗 1 点、磁器染付碗 2 点、陶器タイル 1 点が出土した。

13-1 区全体の遺物は、合計 56 点である。

(4) 小結

今回の調査区は狭小で、撹乱も多かったものの、中世の溝や土坑などを検出することができた。建物跡など直接生活に結びつくような遺構は検出できず、出土遺物も希少で破片であることも勘案すると、調査区付近は集落の縁辺部に相当し、中世以降は水田であったと考えられる。

北西部に位置する 1304 溝は、検出した位置から判断して現在供用している一般国道 42 号湯浅御坊道路（Ⅰ）建設に伴う発掘調査のM地区（1995 年 3 月発行『藤並地区遺跡発掘調査報告書 ― 一般国道 42 号湯浅御坊道路（Ⅰ）建設に伴う発掘調査 ―』掲載）で検出した溝状遺構に繋がり、用水路であった可能性がある。

当地が水田となるのは、1305 落ち込みが埋まった後の中世以降であると考えられ、地形が南から北に緩やかに下ることからも棚田状の水田であった可能性高い。

15　13-2・3 区（図 36・38、写真図版 13・14・16）

調査面積は、261.2 ㎡である。

(1) 基本層序

調査対象地は、現在供用している湯浅御坊道路が建設される以前は、水田から転作された果樹園で、道路建設以降は造成されて宅地となっていた。この時の造成土を第 0 層として、それ以下の基本層を 10 層に分けている。1 層は造成以前の耕作土、2 層は近世以降の整地土、3 層は近世以降の耕作土、4 層は近世以降の床土、5 層は中世の耕作土及び遺構の堆積埋土、6 層は中世（鎌倉時代）以前の堆積層、7 層～ 10 層は旧石器を包含する堆積層の対応層、11 層は基盤層となる。

基盤層 11 層は、2.5Y5/6 黄褐色粘質シルトとなる。

(2) 検出遺構

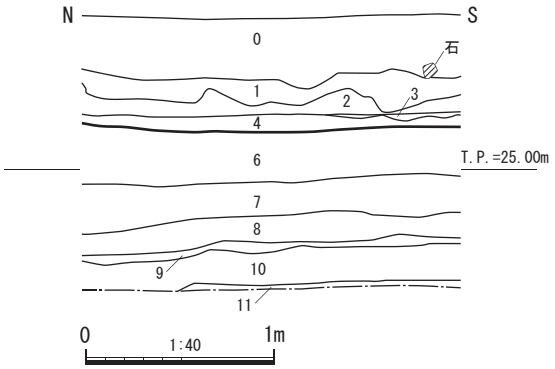
調査区 13-2 区の北端にコンクリート擁壁建設時の撹乱、北西隅には浄化槽による撹乱、西側から東側にかけて用水路 2 条、南側から北側にかけて用水路 1 条による撹乱がある。

基盤層上面にあたる旧地形は南西側が高く、北東側に向かって低くなる。13-3 区で落ち込み 1 基、13-2 区で土坑 1 基・落ち込み 1 基を検出した。

1311 落ち込み

1311 落ち込みは、13-3 区の南西隅に位置する。調査区南壁及び西壁断面土層と平面から 6 層上面で検出した。南側と西側は調査区外に延びるため、全容は不明である。落ち込みの平面規模は、東西 1.50 m以上、南北 2.70 m以上、残存の深さは 0.13 mを測る。

遺物は、室町時代の瀬戸美濃系天目茶碗（31）が出土した。



0. 盛土　10YR5/4 にぶい黄褐色　N4/0 灰色　粘板岩・泥岩質？岩砕
1. 耕作土　2.5Y5/1 黄灰色細砂・粗砂混砂質シルト
2. 整地土　2.5Y8/2 灰白色粗砂混シルト大ブロック　2.5Y5/4 ～ 5/6 黄褐色粗砂混シルト大ブロック　1 層の耕作土が草木の根に入り込む　まだら状態
3. 旧水田耕作土　5Y5/1 灰色細砂混砂質シルト、しまりなし、2.5Y5/1 黄灰色ぎみ
4. 旧床土　2.5Y5/3 ～ 5/4 黄褐色細砂混シルト、ややしまりあり、5Y6/1 灰色ぎみ
6. 2.5Y6/1 黄灰色細砂・粗砂混粘質シルト　2.5Y5/4 ～ 5/3 黄褐色細砂・粗砂混粘質シルト　0.5 ～ 1 ㎝大の円礫を微量含む、乾湿による収縮が著しく剥離状態　まだら状態、ややしまりあり
7. 2.5Y6/1 黄灰色シルト　10BG7/1 明青灰色ぎみ　2.5Y5/4 黄褐色シルト　まだら状態、しまりあり
8. 旧石器出土対応層　2.5Y3/1 黒褐色～ 10YR3/1 黒褐色シルト、カリカリ状態、しまりあり、5 ～ 0m ～南壁にかけてややしまり弱くなり粗砂を少量含む
9. 旧石器出土対応層　2.5Y6/2 灰黄色粗砂・細礫混砂質シルト、しまりなし
10. 旧石器出土対応層　2.5Y5/6 黄褐色細砂・粗砂混砂質シルト、ややしまりあり、11 層に比して砂質土が高い、0.5 ～ 1 ㎝大の円礫を微量含む
11. 基盤層　2.5Y5/6 黄褐色粘質シルト、しまり強い、0.5 ～ 1 ㎝大の円礫を微量含む　7 層以下、上位からの 2.5Y6/1 黄灰色シルトの縦根痕状入る

図 38　13－2・3 区　調査区東壁断面土層図

1312 土坑

1312 土坑は、13-2 区の南西隅に位置する。西側の一部と北側が昭和の水路の削平を受けるため全容は不明である。土坑の平面規模は、短軸（東西）0. 70 m以上、長軸（南北）1. 35 m以上、残存の深さは 0. 34 mを測る。南側が浅く、北側になるにつれ深くなる。

遺物は、奈良時代の須恵器甕 1 点、江戸時代の肥前系磁器染付碗 2 点が出土した。

1313 落ち込み

1313 落ち込みは、13-2 区の北端に位置する。北側は近代以降の水路、西側は浄化槽の撹乱を受けるため全容は不明である。落ち込みの平面規模は、東西 3. 50 m以上、南北 2. 10 m以上、残存の深さは不揃いで 0. 15 ～ 0. 24 mを測る。

遺物は、出土していない。

1313 落ち込みは、位置関係から 13-1 区で検出した 1305 落ち込みと関係するものと考えられる。

(3) 出土遺物

その他の遺物には、2 層から鎌倉時代と考えられる土師器皿 2 点、1 層から近代以降と考えられる陶器鉢 1 点・壺 1 点、染付 2 点、磁器碗 4 点が出土した。

13-2・3 区全体の遺物は、合計 14 点である。

(4) 小結

今回の調査区は狭小で、撹乱も多かったものの、中世の落ち込みや江戸時代の土坑などを検出することができた。建物跡など直接生活に結びつくような遺構は検出できず、出土遺物も希少で破片であることも勘案すると、調査区付近は集落の縁辺部に相当し、中世以降は水田であったと考えられる。

当地が水田となるのは、1313 落ち込みが埋まった後の中世以降であると考えられ、地形が南西から北東に緩やかに下ることからも 13-1 区同様に棚田状の水田であった可能性高い。

13-2･3 区は､1995 年 3 月発行『藤並地区遺跡発掘調査報告書 ― 一般国道 42 号湯浅御坊道路（Ⅰ）建設に伴う発掘調査 ―』掲載のM地区南東隅の東隣に位置する。M地区南東隅からは旧石器が多数出土しており､今回の調査でも旧石器の出土が予想された。しかし､旧石器の出土する対応層（7 層～ 10 層）が確認されたものの、旧石器は出土しなかった。これらのことから､『藤並地区遺跡発掘調査報告書』掲載のM地区での旧石器の出土は､かなり限定された範囲にしか存在しない可能性が高いと考えられる。

第Ⅳ章　総括

今回の調査地は、標高 20 ～ 25 m前後の比較的高い場所ではあるが、周辺には独立丘陵が存在するため、湿地状の地形となっている。調査を実施したのは、一般国道 42 号湯浅御坊道路の東側に沿っている主に柑橘畑である。柑橘畑は昭和 40 年代に水田から転作されたらしく、柑橘畑耕作土（第 0 層：盛土）下には大半の地区でそれまでの水田耕作土が存在している。

調査を実施した地点には、主に中世水田耕作土層及び湿地状地形が存在する。大半の調査区で下層確認トレンチを設定し、断面観察を実施した結果、1 区と 13 区を除く地区の下層は流路が網の目状に巡っていた様で、シルト層と微砂・細砂層が互層となるパターンの堆積、最下層では砂層や細かい礫層が認められた。しかしながら、トレンチを掘削した範囲ではあるが、湿地状地形の堆積土（第 4 層）下位層の流路の堆積埋土からの出土遺物は皆無であった。

また、調査区の 9 区・10 区・12 区においては、微高地から湿地への落ちを検出した。特に 9 区で検出した微高地は調査地の東端に当たり、東側は民家が建ち並んでいることから、微高地は東側の民家に延びていることが推測される。調査地の水田であった箇所は、元々は微低地地形で、自然流路から湿地状地形、湿地状地形から水田に改変され、現代に至ったと考えられる。

中世の水田耕作土層からは旧石器時代に関係すると考えられる硬質頁岩の剥片、弥生時代の石鏃や奈良時代の須恵器も出土したが、これらの時期の遺構は皆無であった。しかし、近隣の既往の調査では、奈良時代の遺構が検出されているので、東側に広がると考えられる微高地上は生活域と考えられるため今後の調査が期待される。

一般国道 42 号湯浅御坊道路の本線部分で調査を行った際には、掘立柱建物や溝などが検出されており、生活の痕跡を多く確認しているが、今回の調査地になるほど遺構が希薄になっていくようである。現地形でも一般国道 42 号湯浅御坊道路本線から東に緩やかに下り、また南から北に向かっても緩やかに下っていく。このことから、今回の調査地は集落などの縁辺部にあたると考えられる。

また、全区を含めて縄文・弥生・古墳時代の生活領域からも外れた範囲である事も確認された。

【引用・参考文献】

1982 「地理的環境」『田殿・尾中遺跡―庄地区道 12 号長田連絡改修工事に伴なう埋蔵文化財発掘調査概要報告書―』吉備町教育委員会

1985 『野田・藤並地区遺跡発掘調査報告書―海南湯浅道路に伴う関連遺跡発掘調査―』和歌山県教育委員会

1995 『藤並地区遺跡発掘調査報告書―一般国道 42 号湯浅御坊道路（Ⅰ）建設に伴う発掘調査―』財団法人和歌山県文化財センター

2005 『吉備町の文化財』吉備町教育委員会

2008 『藤並地区遺跡―町道吉備インター連絡線改修工事に伴う発掘調査報告―』有田川町遺跡調査会発掘調査報告書　第 2 集　有田川町遺跡調査会

2012 『藤並地区遺跡―県道吉備金屋線道路改良工事に伴う発掘調査報告書―』公益財団法人和歌山県文化財センター

表３　藤並地区遺跡　各地区出土遺物数量（北端の地区から南側の地区へ）

大凡の時代		旧石器・縄文			弥生前・中期				弥生後期・終末期			古墳（布留式～）				飛鳥・奈良・平安						平安末・鎌倉・室町									江戸（近代含む）				不明	合計
	地区	縄文土器	石器剥片他	小計	弥生土器 前期	弥生土器 中期	石器剥片他	小計	弥生土器	石器剥片他	小計	土師器	須恵器	その他不明	小計	土師器	黒色土器	須恵器	緑釉灰釉	その他瓦不明	小計	土師器	瓦器	土釜	須恵質土器	瓦質土器	陶器	磁器	その他瓦不明	小計	土師質土器	陶磁器	その他瓦不明	小計		
1	1区	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	11	16	2	2	0	0	0	0	31	0	4	1	5	0	37
2	2区	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8	0	37	0	2	47	10	90	0	2	0	0	0	1	103	0	0	0	0	0	150
3	3区	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
4	4区	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9	0	2	11	11	42	0	4	0	0	1	4	62	0	0	0	0	0	74
5	5区	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	4	0	5
6	6区	0	0	0	0	1	1	2	1	1	2	0	0	0	0	8	0	9	0	0	17	27	196	12	2	5	3	2	7	254	0	0	0	0	0	275
7	7区	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	6	59	2	0	0	2	1	1	71	0	1	0	1	0	73
8	8区	0	0	0	0	0	2	2	0	0	0	0	0	0	0	5	0	33	0	1	39	22	74	7	2	1	0	1	4	111	0	5	5	10	1	163
9	9区	0	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	26	0	1	28	13	75	3	1	1	2	2	8	105	0	3	0	3	0	138
10	10区	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	0	0	6	8	44	3	0	3	1	0	4	63	0	1	1	2	0	71
11	11区	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	0	0	0	0	3	0	1	0	0	4	8	16	1	0	0	0	2	2	29	0	3	1	4	0	39
12	12区	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2	3	13	0	0	0	3	2	2	23	1	3	0	4	0	29
15	13区	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	7	42	0	0	0	2	0	3	54	0	14	1	15	0	70
合　計		0	2	2	0	1	4	5	1	3	4	0	0	0	0	27	0	125	0	6	158	126	667	30	13	10	13	11	36	906	1	34	13	48	1	1124

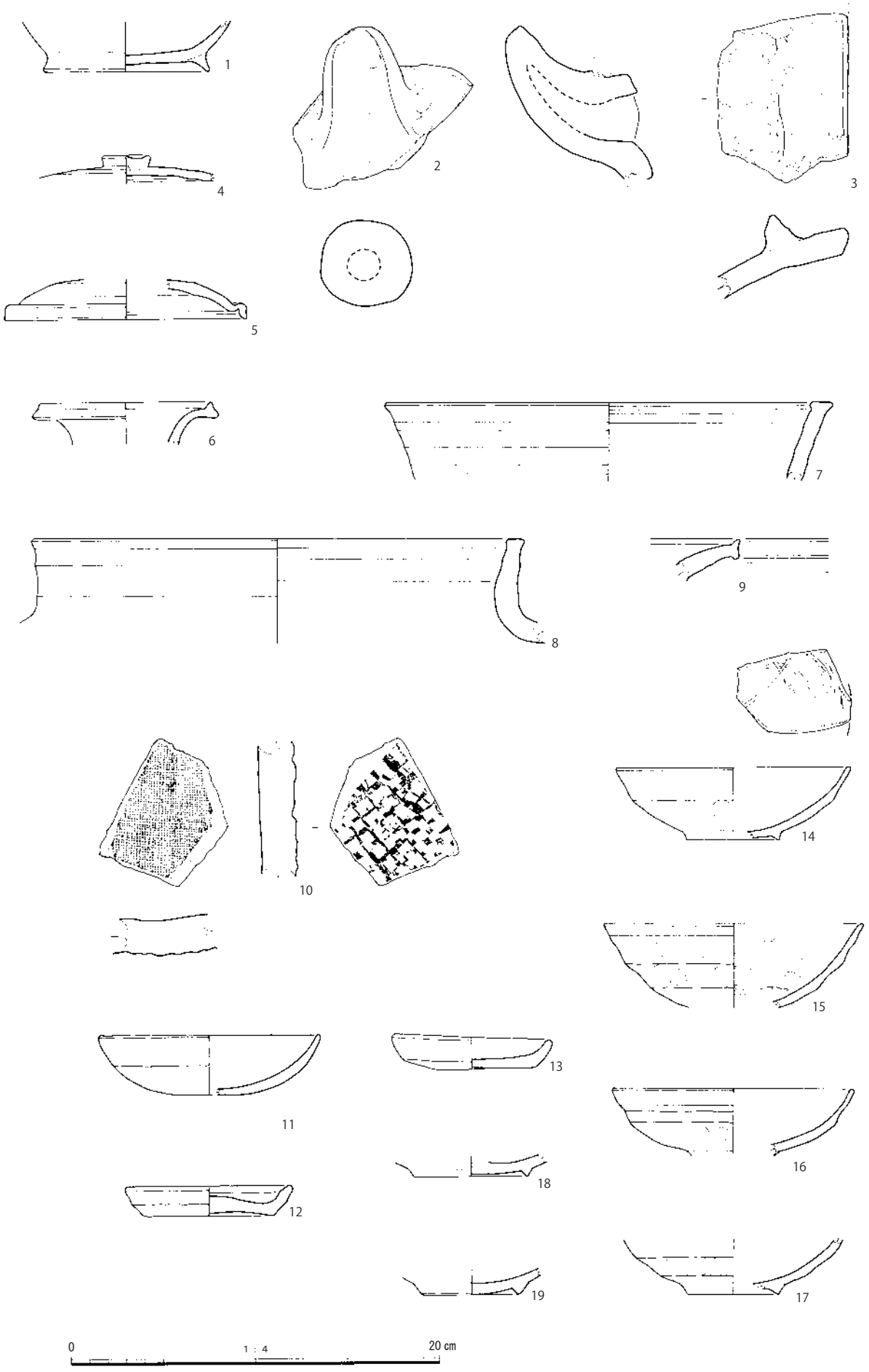
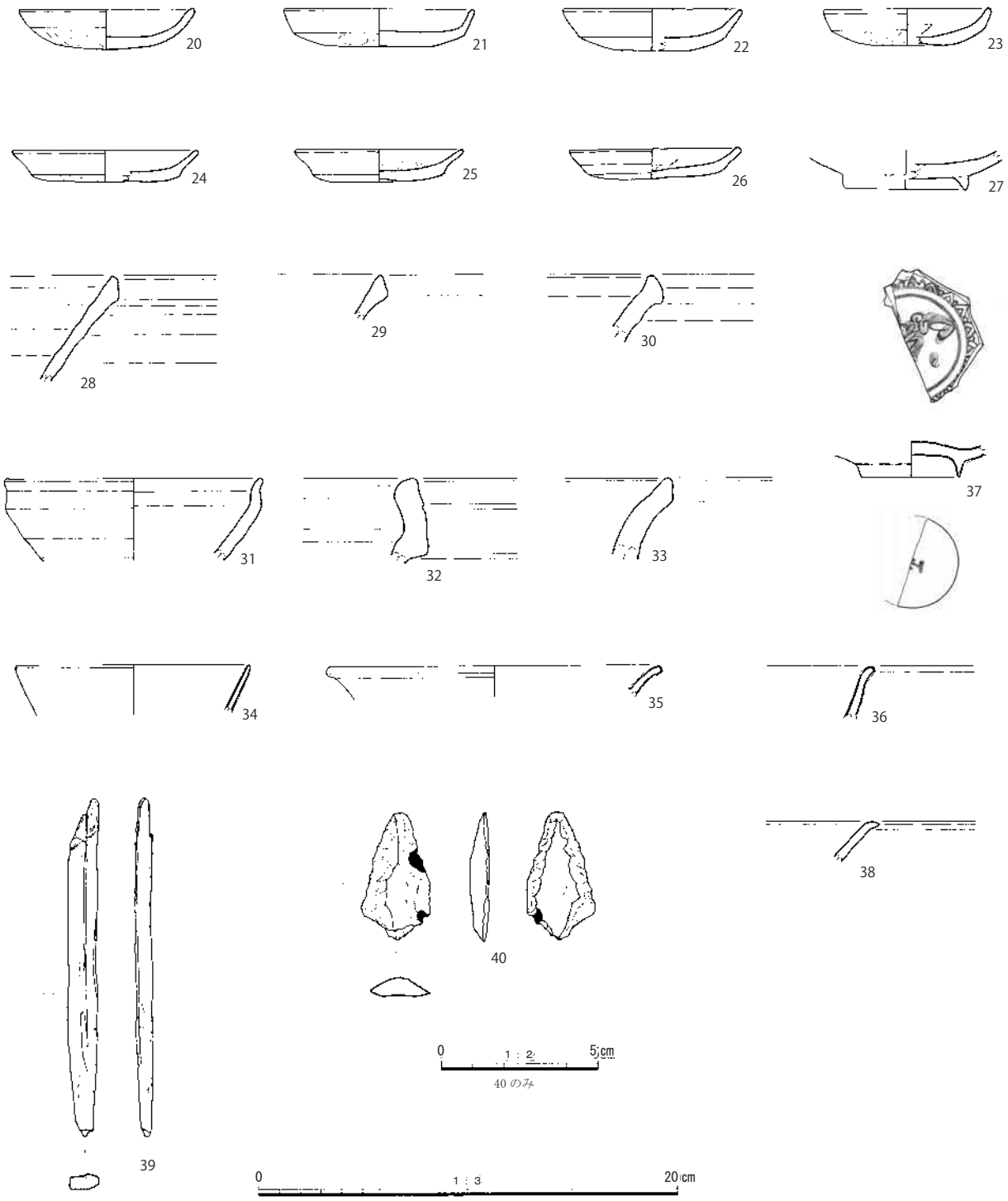


図 40　出土遺物実測図 1



１区：19、２区：7・25・27、４区：28・29・36、６区：2・12・16・18・22・26・30・33・39・40、
７区：11・15・23、8区：3・4・6・9・10・13・14・17・24、9区：1・20・21・32・34・38、
10区：5、11区：35、12区：8・37、13区：31

図 41　出土遺物実測図２

2015 ～ 2018 藤並地区遺跡　出土遺物一覧

No　1　.

遺物番号	挿図番号	写真図版	調査次数 地区	実測遺物登録番号	出土遺物登録番号	地区 取上区画	遺構面 堆積層位	遺構番号・種類 遺構層位	遺物種類	器種	部位	残存率	備考
1	39	15	第２次 ９区	30	119	E17 f2･3	第４層	――	土師器	枕	底部（高台部）	高台部 25%	全体に磨滅著しいため調整不明確、高台断面形は非常に高い断面三角形、奈良時代、反転復元
2	39	15	第２次 ６区	15	92	E16 h2	取上げ２	――	土師器	鍋	把手	90%	全体に磨滅著しいため調整不明確、把手は鍋体部に挿入する、胎土に１～ 2mm 大の砂粒を多量に含む、奈良時代
3	39	15	第１次 ８区	23	27	E16 g20	――	801 自然流路 埋土	土師器	竈	袖	5% 以下	全体に磨滅著しいため調整不明確、外面は縦位の粗いハケ調整の後に突帯を貼り付け、胎土に１～ 3mm 大の砂粒を多量に含む、奈良時代、細片のため断面・表面のみ
4	39	15	第１次 ８区	19	14	E16 g19	東壁側溝	――	須恵器	坏蓋	摘部 ～天井部	5%	ロクロ回転方向：右回り、外面全体に自然釉が薄く付着する、奈良時代、反転復元
5	39	15	第２次 10 区	35	154	E17 e20	第４層	――	須恵器	坏蓋	口縁部	20%	ロクロ回転方向：右回り、天井部外面は回転ヘラケズリか、奈良時代、反転復元
6	39	15	第１次 ８区	27	41	E16 g21	――	801 自然流路 上層	須恵器	壺	口縁部	20%	ロクロ回転方向：左回り、内外面全体に自然釉厚く付着する、奈良時代、反転復元
7	39	15	第２次 ２区	4	18	E12 r18	第４層	――	須恵器	甕	口縁部	10%	ロクロ回転方向：右回り．奈良時代、反転復元、細片のため口径不明確
8	39	15	第２次 12 区	38	165	E18 d5	――	1201 自然流路 第４層	須恵器	甕	口縁部	10%	ロクロ回転方向：左回り、焼成遺存はやや軟質化、奈良時代、反転復元、細片のため口径不明確
9	39	15	第１次 ８区	26	39	E16 g21	――	802 溝	須恵器	甕	口縁部	5% 以下	ロクロ回転方向：右回り、焼成遺存はやや軟質化、胎土は極めて良好緻密、奈良時代、細片のため断面のみ
10	39	15	第１次 ８区	25	37	E16 h21	――	802 溝 下層	瓦	平瓦	――	――	焼成遺存は良好堅緻、凹面布目痕、凸面格子タタキ、奈良時代、細片のため断面・表面・背面のみ
11	39	15	第２次 ７区	16	101	E16 g13	第４層 西壁側溝	――	土師器	皿	口縁部 ～底部	25%	全体に磨滅著しいため調整不明確、底部底面はユビオサエ・内面はユビナデ、鎌倉時代、反転復元
12	39	15	第２次 ６区	13	82	E16 g8	第４層	――	土師器	小皿	口縁部 ～底部	30%	焼成遺存はやや軟質化、全体に磨滅著しいため調整不明確、底部底面は回転糸切りの痕跡あり、鎌倉時代、反転復元
13	39	15	第１次 ８区	22	26	E16 h21	――	801 自然流路 埋土	土師器	小皿	口縁部 ～底部	75%	全体に磨滅著しいため調整不明確、鎌倉時代
14	39	15	第１次 ８区	20	20	E16 g20 ～ 22	東壁側溝	801 自然流路 埋土	瓦器	椀	口縁部 ～底部（高台部）	10%	焼成遺存はまま良好、外面はやや磨滅ぎみのため調整不明確、内底面（見込）に連結輪状の暗文・内面側壁のヘラミガキは幅１～ 2mm でやや粗く施される、高台断面形はやや低い断面三角形、鎌倉時代、反転復元
15	39	15	第２次 ７区	17	101	E16 g13	第４層 西壁側溝	――	瓦器	椀	口縁部 ～体部	25%	焼成遺存はやや軟質化、全体に磨滅著しいため調整・暗文不明確、内面側壁のヘラミガキは幅２～ 3mm でやや粗く施される、鎌倉時代、反転復元
16	39	15	第２次 ６区	11	77	E16 h8	第３' 層 第４層	――	瓦器	椀	口縁部 ～底部	10%	焼成遺存はやや軟質化、全体に磨滅著しいため調整・暗文不明、鎌倉時代、反転復元
17	39	15	第１次 ８区	24	33	E16 h21	――	801 自然流路 埋土	瓦器	椀	体部 ～底部（高台部）	20%	焼成遺存はやや軟質化、全体に磨滅著しいため調整・暗文不明、内面側壁のヘラミガキは僅かに遺存するが図化できない、高台断面形は高い断面三角形、鎌倉時代、反転復元
18	39	15	第２次 ６区	12	82	E16 g8	第４層	――	瓦器	碗	底部（高台部）	40%	焼成遺存はまま良好、全体に磨滅著しいため調整・暗文不明、高台断面形は高い逆三角形、鎌倉時代、反転復元
19	39	15	第１次 １区	1	2	E12 s8･9	調査区西側	――	瓦器	椀	底部（高台部）	高台部 50%	焼成遺存はやや軟質化、全体に磨滅著しいため調整・暗文不明確、内底面（見込）は窪み底状を呈する、高台断面形は高い逆三角形、鎌倉時代、反転復元
20	40	16	第２次 ９区	31	117	E17 g4	第４層 西壁側溝	――	瓦器	小皿	口縁部 ～底部	25%	焼成遺存はまま良好堅緻、全体にやや磨滅ぎみ、鎌倉時代、反転復元
21	40	16	第２次 ９区	29	113	E16 g24	第４層 北壁側溝	――	瓦器	小皿	口縁部 ～底部	25%	焼成遺存はまま良好堅緻、全体に磨滅ぎみのため調整不明確、内面全体は埋没堆積土の色素沈着のためまだらに 2.5Y6/8 明黄褐色を呈する、鎌倉時代、反転復元
22	40	16	第２次 ６区	14	91	E16 h2	取上げ１	――	瓦器	小皿	口縁部 ～底部	40%	焼成遺存はやや軟質化、全体に磨滅著しいため調整不明確、鎌倉時代、反転復元
23	40	16	第２次 ７区	18	106	E16 h12	第４層 西壁側溝	――	瓦器	小皿	口縁部 ～底部	30%	焼成遺存はやや軟質化、全体に磨滅著しいため調整不明確、鎌倉時代、反転復元
24	40	――	第１次 ８区	21	21	E16 h20 ～ 22	西壁側溝	801 自然流路 埋土	瓦器	小皿	口縁部 ～底部	20%	焼成遺存はまま良好、内面全体は埋没埋積土の色素沈着のため 2.5Y6/8 明黄褐色を呈する、外面腰部は細かい間隔の連続するユビオサエ、鎌倉時代、反転復元
25	40	16	第２次 ２区	2	14	E12 r19	第４層	――	瓦器	小皿	口縁部 ～底部	50%	焼成遺存は軟質化、全体に歪みやや著しい、全体に磨滅著しいため調整不明確、鎌倉時代、一部反転復元
26	40	16	第２次 ６区	8	63	E16 g2	第４層	――	瓦器	小皿	口縁部 ～底部	50%	焼成遺存はやや軟質化、全体に歪みやや著しい、全体に磨滅やや著しいため調整不明確、鎌倉時代
27	40	16	第２次 ２区	3	14	E12 r19	第４層	――	山茶碗	椀	底部（高台部）	高台部 15%	焼成遺存はやや軟質化、内底面（見込）見込に自然釉が薄く付着する、高台断面形は高い逆三角形、底部底面は軽い回転ヘラケズリ調整、鎌倉時代、反転復元
28	40	16	第２次 ４区	7	24	E5 j11	第４層	――	東播系 須恵器	捏鉢	口縁部	5% 以下	ロクロ回転方向：左回り、口縁部端面に自然釉が薄く付着する、東播系第Ⅱ期第２段階、細片のため断面のみ
29	40	16	第２次 ４区	5	23	E5 i14	第４層	――	東播系 須恵器	捏鉢	口縁部	5% 以下	ロクロ回転方向：左回りか、口縁部端面に自然釉が厚く付着する、東播系第Ⅲ期第１段階、細片のため断面のみ
30	40	16	第２次 ６区	9	67	E16 h2	第４層	――	東播系 須恵器	捏鉢	口縁部	5%	ロクロ回転：左回り、口縁部端面に自然釉が薄く付着する、東播系第Ⅲ期第２段階、細片のため断面のみ
31	40	16	第３次 13･3 区	41	2	E18a23	５層	――	瀬戸美濃系	天目茶碗	口縁部	5%	内外面共に 2.5YR2/1 赤黒色を呈する、外面の一部に釉溜りが認められる、室町時代、反転復元、細片のため口径・傾き不明確
32	40	16	第２次 ９区	33	134	E17 e4	第４層 東壁側溝	――	無袖陶器 備前	擂鉢	口縁部	5% 以下	内面は 10R4/1 暗赤灰色・外面は 10R4/3 赤褐色を呈する、乗岡編年中世 6a 期、細片のため断面のみ
33	40	16	第２次 ６区	10	68	E16 h3	第４層	――	常滑	甕	口縁部	5% 以下	ロクロ回転方向：左回り、口縁部内面に自然釉が薄く付着する、鎌倉時代、細片のため断面のみ
34	40	――	第２次 ９区	28	113	E16 g24	第４層 北壁側溝	――	龍泉窯系 青磁	碗	口縁部	10%	内外面共に無数の細かい擦痕あり、釉調は 7.5GY7/1 明緑灰色を呈する、鎌倉時代、反転復元、細片のため口径・傾き不明確
35	40	16	第１次 11 区	36	54	E17 e･f16	――	――	龍泉窯系 青磁	碗	口縁部	10%	内外面共に細かい貫入あり、釉調は 10Y5/2 オリーブ灰色を呈する、鎌倉時代か、反転復元、細片のため口径・傾き不明確
36	40	16	第２次 ４区	6	24	E5 j11	第４層	――	龍泉窯系 青磁	碗	口縁部	5% 以下	内外面共に釉調は 10Y6/2 オリーブ灰色を呈する、内外面共に細かい貫入あり、鎌倉時代、反転復元

2015 ～ 2018 藤並地区遺跡　出土遺物一覧

No　2　.

遺物番号	挿図番号	写真図版	調査次数 地区	実測遺物登録番号	出土遺物登録番号	地区 取上区画	遺構面 堆積層位	遺構番号・種類 遺構層位	遺物種類	器種	部位	残存率	備考
37	40	16	第２次 12 区	37	161	E18 c4･5	――	1201 自然流路 第４層	中国製 染付	碗	底部（高台部）	50%	釉調は 10BG7/1 明青灰色を呈する、室町時代、反転復元
38	40	16	第２次 9 区	32	123	E17 f7	第４層	――	白磁	碗	口縁部	5% 以下	内面に無数の細かい擦痕あり、釉調は 10Y7/1 灰白色を呈する、平安時代末～鎌倉時代、細片のため断面のみ

藤並地区遺跡　出土遺物一覧　木製品（W）・石器（S）

遺物番号	挿図番号	写真図版	調査次数 地区	実測遺物登録番号	出土遺物登録番号	取上区画	遺構番号 層位	遺構面 堆積層	遺物種類	器種	法量 長さ（cm）	法量 幅（cm）	法量 厚さ（cm）	法量 重量（g）	石材	備考
39	40	16	第２次 6 区	W1	70	E16 h5	――	第４層	木器	籌木	（16.1）	1.3	0.7	――	樹種同定未	基部は一部欠損か、先端は炭化
40	40	16	第２次 6 区	S1	43	E16 h2	――	第３層 底面 北壁側溝	石器	石鏃	（5.1）	2	0.5	（4.72）	サヌカイト	先端及び墓部は一部欠損か、側縁に一部欠損、細部調整はやや粗い

報告書抄録

報告書抄録			
ふりがな	ふじなみちくいせき		
書名	藤並地区遺跡		
副書名	一般国道 42 号（湯浅御坊道路）4 車線化事業に伴う発掘調査報告書		
巻次			
シリーズ名			
シリーズ番号			
編著者名	土井孝之		
編集機関	公益財団法人　和歌山県文化財センター		
所在地	〒 640-8301 和歌山市岩橋 1263 番地の 1	TEL	073-472-3710
発行年月日	西暦 2019 年 3 月 29 日		

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
藤並地区遺跡（ふじなみちくいせき）	和歌山県有田郡（わかやまけんありだぐん） 有田川町（ありだがわちょう） 土生（はぶ）・明王寺（みょうおうじ）・水尻（みずじり）	303666	吉備地区 32	34° 3′ 22″	135° 12′ 2″	第 1 次調査 20151125 ～ 20160308	699	一般国道 42 号（湯浅御坊道路）4 車線化事業
						第 2 次調査 20160325 ～ 20160822	2, 195	
						第 3 次調査（その 1） 20170817 ～ 20170831	118. 6	
						第 3 次調査（その 2） 20180529 ～ 20180731	261. 2	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
藤並地区遺跡	散布地	奈良時代	なし	土師器（椀・甕）、須恵器（坏・蓋・壺・甕）、瓦（平瓦）など	遺物の殆んどが、中世の水田耕作土・自然流路からの出土。
		鎌倉時代	落ち込み、水田跡、自然流路	土師器（皿・小皿・土釜）、瓦器（椀・小椀・小皿・甕）、陶器（備前・常滑）、磁器（青磁碗、白磁碗）など	遺物全体の中では、比率的に最も多い段階。遺物は二次的な水田耕作土からの出土。
		室町時代	水田跡	土師器（土釜）、瓦質（甕・火舎）、陶器（備前）	遺物は二次的な水田耕作土からの出土。

要約

各調査区の遺構面は、鎌倉時代から江戸時代に至る水田耕作土層を主体として、遺構検出面は 1 面のみが確認できた。遺構の主だったものとして、鎌倉～室町時代の土坑・自然流路・湿地状地形（落ち込み）などを、13 － 1 区では水田耕作に伴う小溝群を検出すると共に、一部で地震による液状化の噴砂を確認した。なお、一部の地区において人間・牛の足跡と考えられる踏み込み遺構を多数検出した。

出土遺物の大半は、遺物包含層（旧水田耕作土）や自然流路から出土した鎌倉時代の土器類で占められるが、室町時代の土器類も少量ある。その他、弥生時代の石鏃・砂岩製台石、奈良時代の土師器・須恵器・瓦がある。また、弥生時代と考えられるサヌカイト製剥片が複数出土した。また、13 － 2・3 区は、今次の調査では最も南側に位置する地区である。1995 年 3 月発行の『藤並地区遺跡発掘調査報告書』掲載のM地区南東隅の東隣に位置する。M地区南東隅からは旧石器が多数出土しており、今回の調査でも旧石器の出土が予想された。しかし、13 － 3 区では、旧石器の出土する対応層を確認したものの、旧石器は出土しなかった。これらのことから、『藤並地区遺跡発掘調査報告書』掲載のM地区での旧石器の出土は、かなり限定された範囲にしか存在しない可能性が高いと考えられる。

1　調査地全景：手前は９区（10区上空から北側を望む）

2　調査地全景：手前は７区（６区上空から南側を望む）

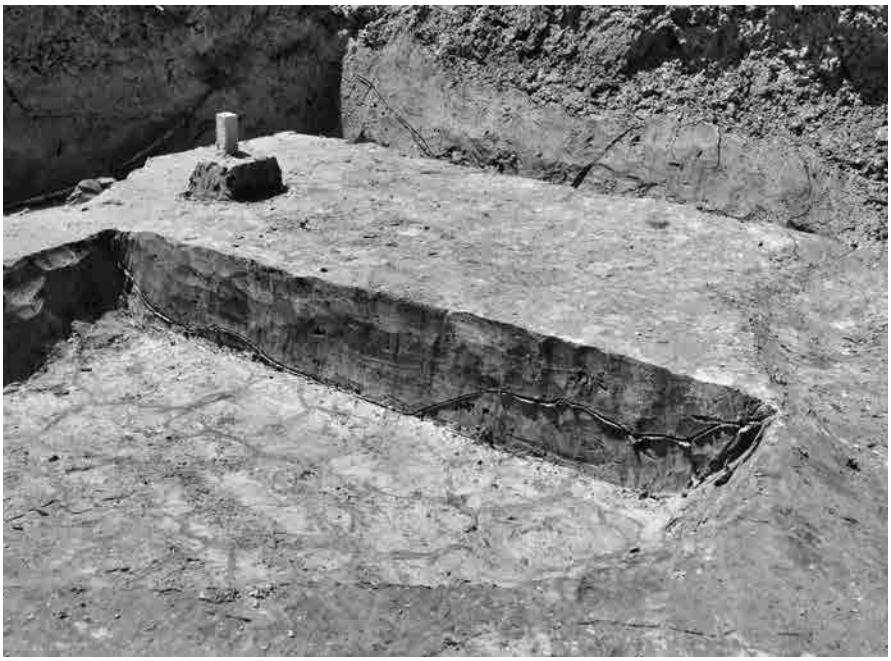
3　１区　調査区全景（北から）

1　2区　調査区全景（南から）

2　2区　調査区東壁北端断面土層（南西から）

1　3区　調査区全景（南から）

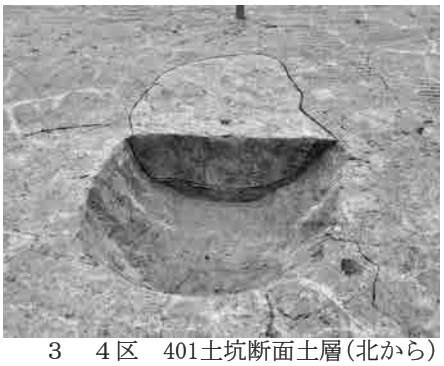
2　3区　調査区西壁中央～北端断面土層（南東から）



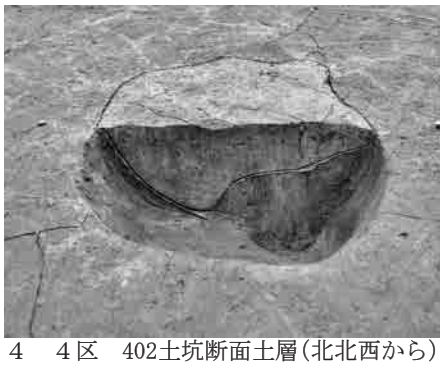
3　3区　302土坑断面土層（北東から）

１　４区　調査区全景（南から）

２　４区　調査区東壁中央断面土層（南西から）

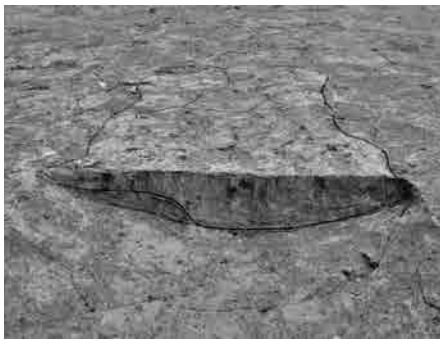


３　４区　401土坑断面土層（北から）



４　４区　402土坑断面土層（北北西から）

５　４区　403土坑断面土層（北東から）



６　４区　405土坑断面土層（南から）

1　5−1区　調査区全景(南から)

2　5−2区　調査区全景(北から)

3　5−2区　調査区東壁断面土層(北西から)

1　6区　調査区全景（南から）

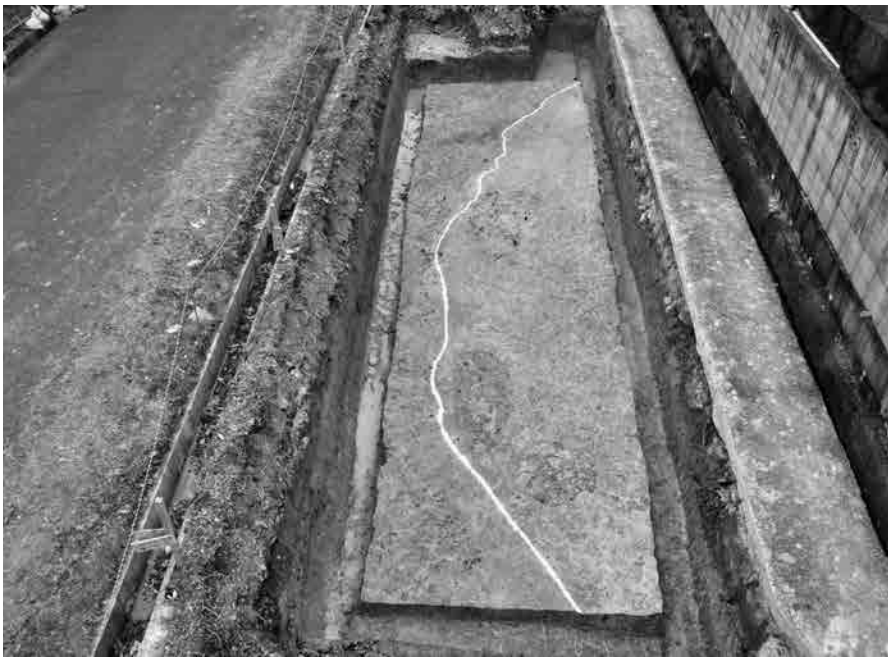
2　6区　調査区西壁断面土層（南東から）

3　6区　石鏃出土状況

4　6区　土器出土状況（南東から）

1　7区　調査区全景(南から)

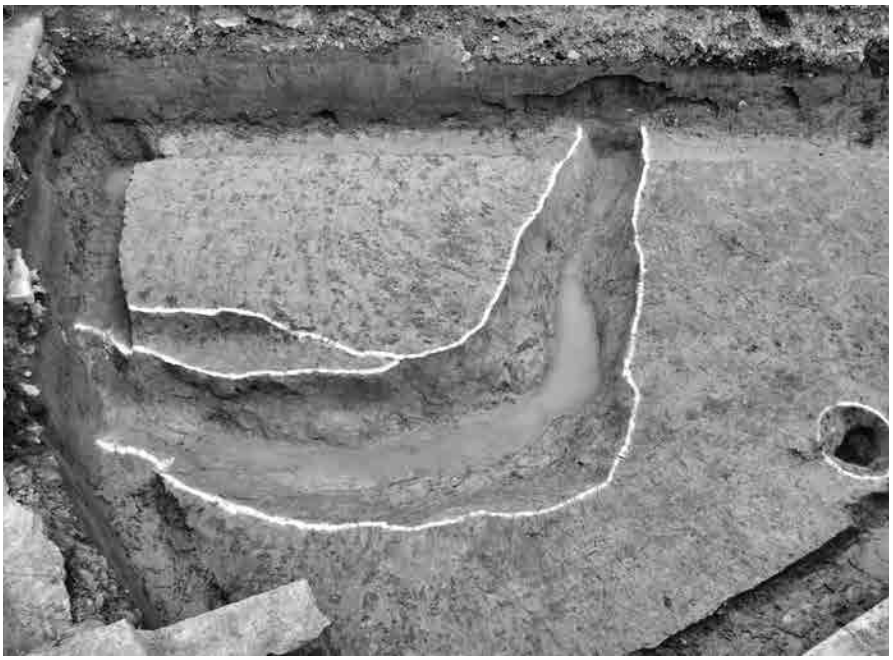
2　7区　調査区西壁断面土層(南東から)



3　8−1区　調査区全景(南から)

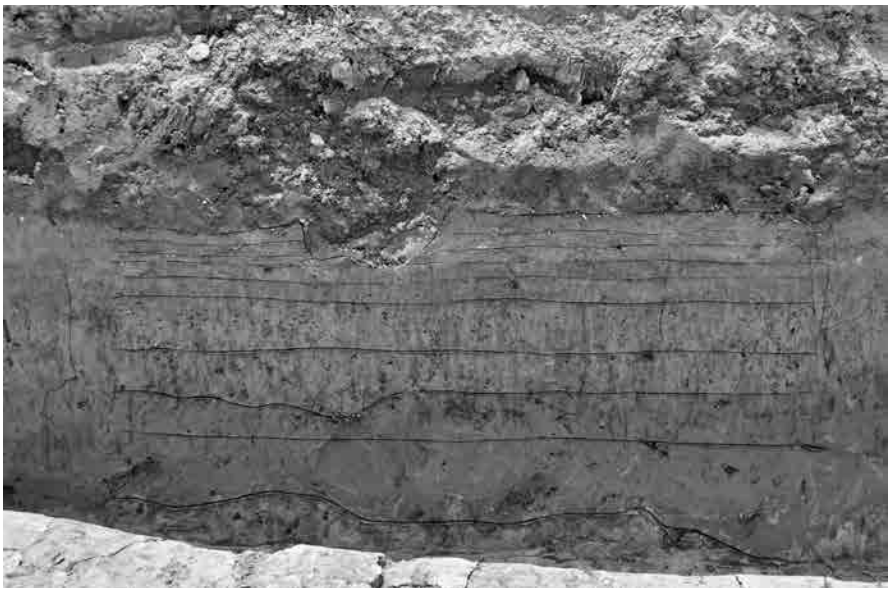
１　８－１区　801落ち込み調査区西壁断面土層（東から）

２　８－２区　調査区全景（北から）



３　８－２区　802溝完掘状況（東から）

１　９区　調査区全景（南から）



２　９区　調査区西壁断面土層（東から）

３　９区　902土坑断面土層（南から）

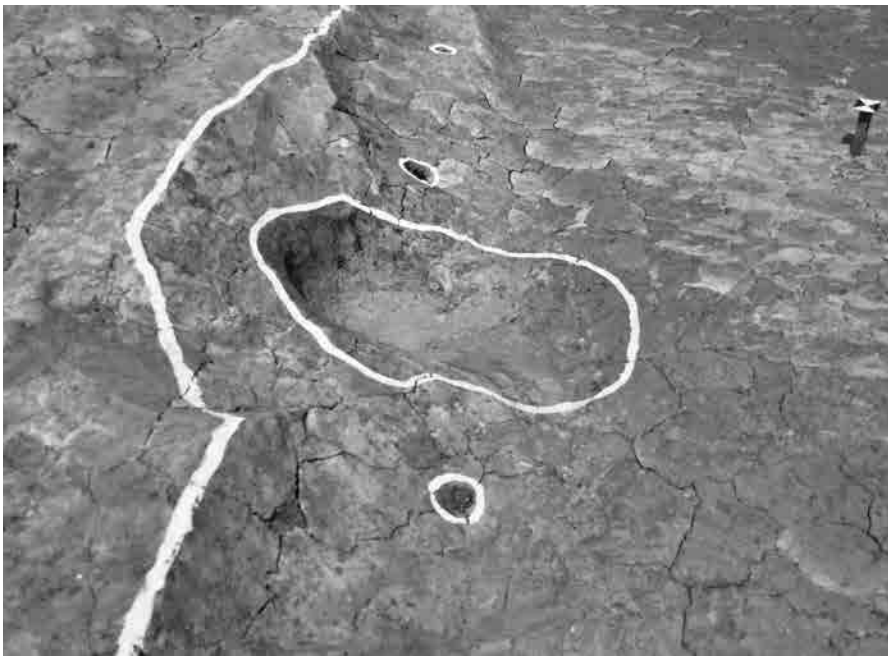
４　９区　903溝断面土層（南から）

５　９区　904土坑断面土層（北から）

６　９区　906土坑断面土層（西から）

1　10区　調査区全景（南から）

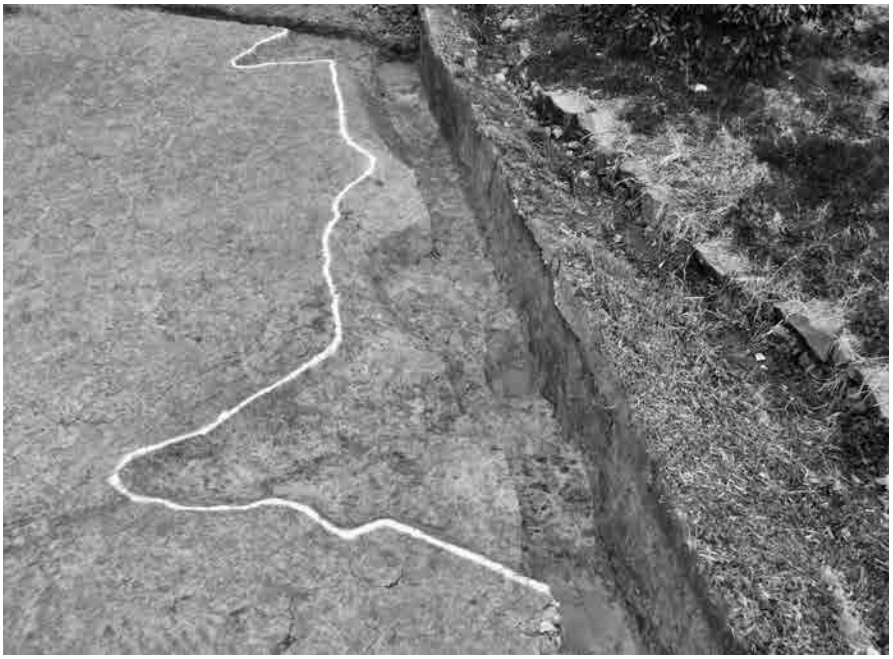
2　10区　護岸杭列検出状況（南から）



3　10区　1001土坑完掘状況（南から）

1　　11−1区　調査区全景（南から）

2　11−2区　調査区全景（北西から）



1　11−２区　1102落ち込み完掘状況（南から）

2　12区　調査区全景（北西から）

3　12区　1201自然流路断面土層（南西から）

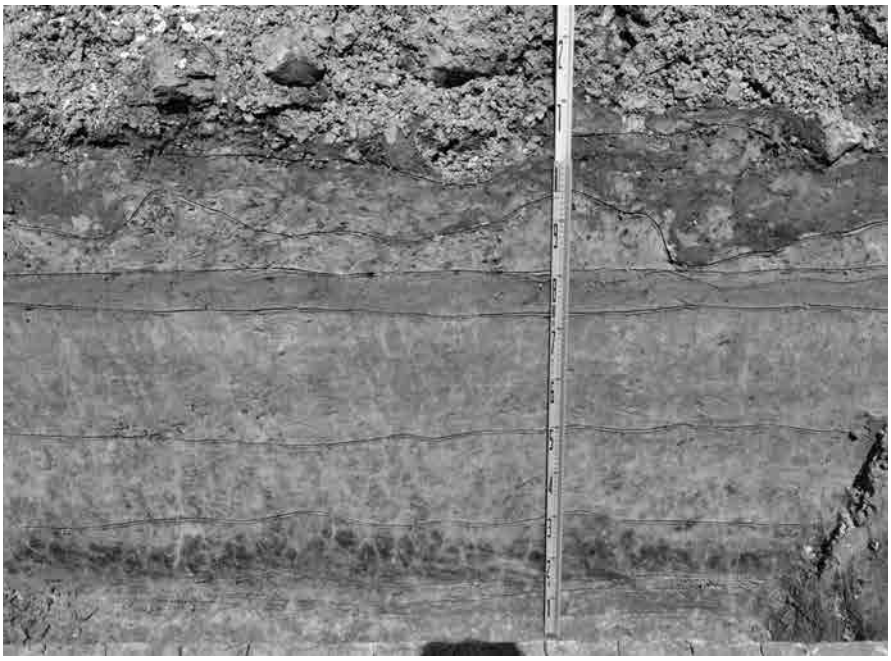
1　13−１区　調査区全景（北西から）

2　13−１区　調査区南壁断面土層（北から）

3　13−２区　調査区全景（北北西から）

1　13−３区　調査区全景（北北西から）

2　13−３区　調査区東壁断面土層（北北西から）



3　13−３区　調査区東壁断面土層（西南西から）

1

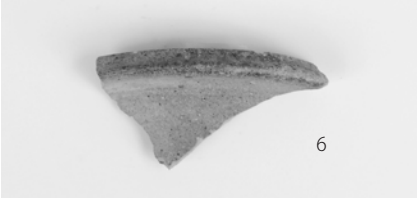
2

2

3

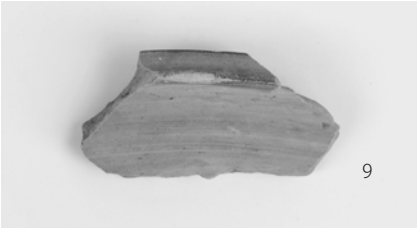
4

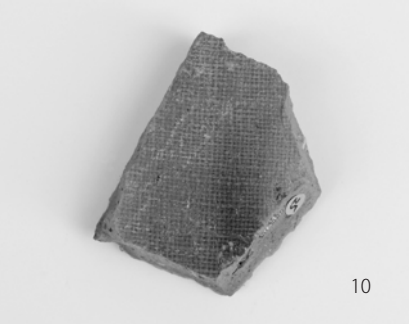
5

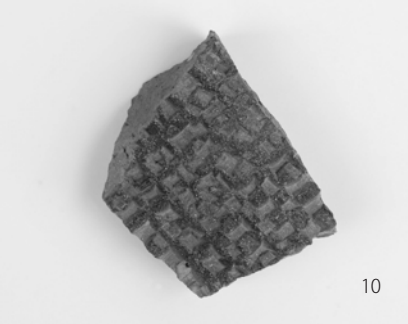

6

7

8


9

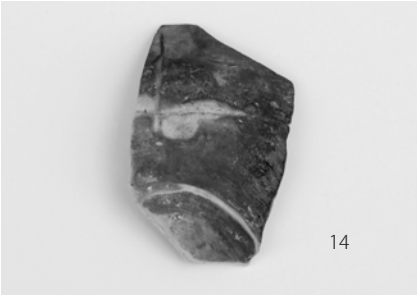

10


10

11

12

13


14

15

16

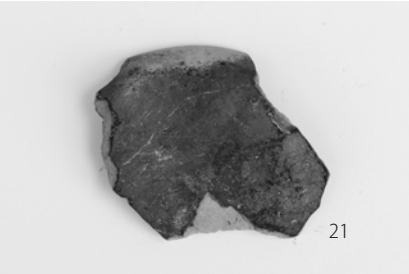
17

18

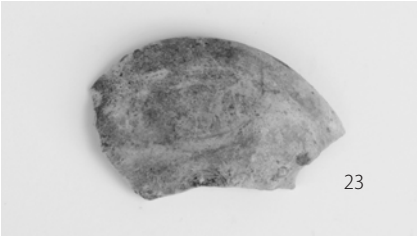
19

1区:19、2区:7、6区:2・12・16・18、7区:11・15、8区:3・4・6・9・10・13・14・17、9区:1、10区:5、12区:8　　図39に対応

20


21

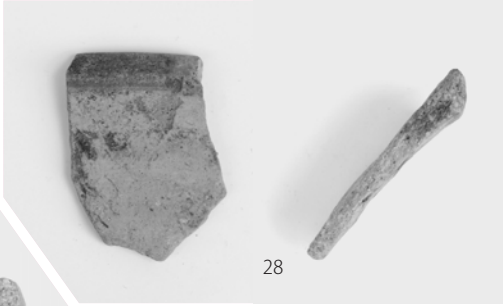
22


23

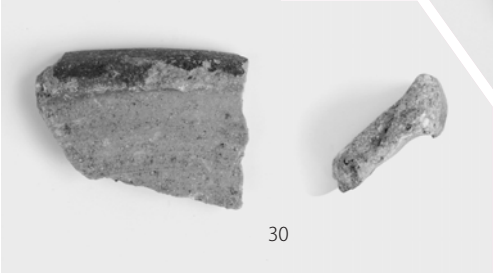
25

26

27


28

29


30

31

32

33

36

35

37

38

39

37

40

2区:25・27、4区:28・29・36、6区:22・26・30・33・39・40、7区:23、9区:20・21・32・38、
11区:35、12区:37、13-3区:31

図40に対応

藤並地区遺跡

－一般国道 42 号（湯浅御坊道路）4 車線化事業に伴う
発掘調査報告書－

発行年月日：2019 年 3 月 29 日
編集・発行：公益財団法人和歌山県文化財センター
和歌山県和歌山市岩橋 1263 番地の 1
印刷・製本：株式会社　協　和
和歌山県海南市赤坂 5 - 3